

聖徒の道

3
1997

末日聖徒イエス・キリスト教会



聖徒の道



表紙

香港、トロハーバーステークのリッキー・ウォン、セリア・ウォン夫妻と子供たち。(左から) ンガイ・ラム、ヘイ・ラム、ホーユン。そしてセリアの母親ケウ・シン・スコイ(表紙および裏表紙の写真で撮影者が明示されていないもの、クレイグ・ダイヤモンド撮影)。

こどものページ

「ロッキー山中での最初の日曜学校」(絵/アーノルド・フライバーグ)
ここに描かれたリチャード・バランタインは、1849年に当教会で最初の日曜学校のクラスを組織し、教えた。聖徒たちがソルトレーク盆地に入植して、2年後のことである。

一般

- 2 大管長会メッセージ——証を述べることの大切さ
第二副管長ジェームズ・E・ファウスト
- 18 炎の人、ブリガム・ヤング ロナルド・K・エスプリン
- 26 騒音の中で ジェンス・ジェンセン、ポール・コナーズ
- 30 息子が耳を傾けるとき
- 34 夢がかなった、香港の聖徒たち ケリー・リックス・アダムス
- 44 勇気を奮い、信仰を語る ニーナ・バサルスカイア、バレリー・パーカー

青少年

- 7 「すべての国民……が祝福される」
- 10 天の近くで ウィリー・ホルドマン、リチャード・M・ロムニー
- 28 信仰の翼にのって ビキ・A・グロバーク
- 46 人の声ではなく
M・ラッセル・バラード

定期特別記事

- 1 読者からの便り
- 16 生ける預言者の言葉
- 25 家庭訪問メッセージ——信仰と忍耐
- 33 モルモンメッセージ——一度だけのつもりでも……

こども

- 2 何度もいのりなさい——パトリシア・P・ピネガー
- 4 ハロルドのリスト——ディアン・L・マンガム作
- 8 分かち合いの時間——せんたくとけっか
カレン・アシュトン
- 10 ちいさなみんなのために——せいぎをえらびましょう
コーリス・クレイトン
- 12 歌 開拓者になろう
ルース・ミューア・ガードナー、バーニャ・Y・ワトキンス
- 14 たんけん——聖徒たちの集合
シェリー・ジョンソン



本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語。季刊——チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会: ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン、ジェームズ・E・ファウスト
十二使徒定員会: ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ボランド、ヘンリー・B・アイリング
編集長: ジャック・H・ゴーズリンド
顧問: L・ライオネル・ケンドリック、ウィリアム・ロルフ・カー

教科課程管理部責任者
 実務部長: ロナルド・L・ナイトン
 企画・編集ディレクター: ブライアン・K・ケリー
 グラフィックスディレクター: アラン・R・ロイボーク

国際機関誌スタッフ
編集主幹: マービン・K・ガードナー
編集主幹補佐: R・バル・ジョンソン
編集副主幹: デビッド・ミッチェル、ディエーン・ウォーカー
編集補佐: ジェニファー・グリーン・ウッド
工程管理: メアリーアン・マーティンデール
出版補佐: ベス・デーリー

デザインスタッフ
機関誌グラフィックスディレクター: M・M・カワサキ

アートディレクター: スコット・バン・カンペン
デザイナー: シェリー・クック
制作主幹: ジェーン・アン・ピーターズ
制作: レジナルド・J・クリステンセン、デニス・カービー、マシュー・H・マックスウェル

予約購読スタッフ
ディレクター: ケイ・W・ブリッグス
配送部長: クリス・クリステンセン
マーケティング部長: ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1997年3月号第41巻第3号
 発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 〒106東京都港区南麻布5-10-30
 電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 リック
 定価 年間予約/海外予約2,400円(送料共)
 半年予約1,200円(送料共)
 普通号/大会号200円

Copyright©1997 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1995年9月 翻訳承認—1995年9月 原題—International Magazines March, 1997. Japanese. 97983 300

●定期購読は、「『聖徒の道』 予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留が郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎03-5668-3391

The *Seito No Michi* (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. and Canadian subscription price is \$14.00 per year. SIXTY days' notice required for change of address. INCLUDE ADDRESS LABEL FROM A RECENT ISSUE; CHANGES CANNOT BE MAID UNLESS BOTH OLD ADDRESS AND NEW ONE ARE INCLUDED. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O. Box 26368, Salt Lake City, UT 84126-0368, USA. SUBSCRIPTION HELP LINE: 1-800-453-3860, U.S. EXT. 2947; CANADA EXT. 2031. CREDIT CARD ORDERS (VISA, MASTERCARD, AMERICAN EXPRESS) MAY BE TAKEN BY PHONE. PERIODICALS POSTAGE PAID AT SALT LAKE CITY, UTAH.

POSTMASTER: Send address changes to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O. Box 26368, Salt Lake City, Utah 84126-0368, U.S.A.

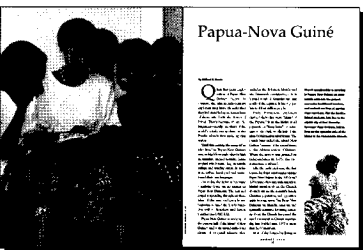
すべての文化を尊重する

わたしは15歳のときに母国ペルーでバプテスマを受けました。そして現在、ロシア・モスクワ伝道部で宣教師として奉仕しています。わたしの国ペルーの教会員は皆、福音を固く信じ、福音に従うことによってこの地上で幸せに暮らせる、と確信しています。ここロシアでもまた、たくさんのすばらしい聖徒たちが同じ福音を信じて生活しています。

宣教師として働くとき、様々な国から来た友人や同僚と出会いますが、親や教師、また政府が、世界中のすべての国とその文化を愛し、尊重するように教えるのは、非常に大切なことだと思います。

イエス・キリストが生きておられることを証します。わたしは家族と隣人を愛しています。そして、自分自身を愛するように隣人を愛する大切さを、人々の心に呼びかけています。

ロシア・モスクワ伝道部
 J. コンドリー長老



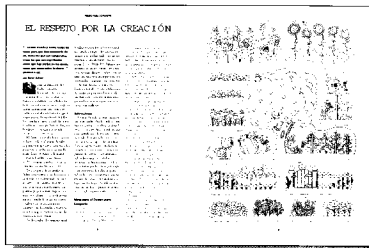
励まし合い、きずなを強める

この国際機関誌のおかげで、世界中の末日聖徒が、お互いを身近に感じて励まし合い、きずなを強めています。それは、イエス・キリストの福音に基づいた経験を、機関誌を通して分かち合えるからです。例えば、1995年8月号のパプアニューギニアに関する記事を読み、わたしはとても多くのことを学びました。この機関誌を読むといつても、福音が「あのゆる国民、部族、言語の民、民族に宣べ伝えられ」ていることを実感します(教義と聖約133:37)。

ブラジル、アラピラカステーク、

アラピラカ第2ワード

ホセ・フェレイラ・ソプリニオ



証を培う

息子が生まれて以来、毎月、『こどものページ』を読み聞かせてきました。内容を理解しているかどうかは分かりませんが、イエス・キリストの福音を学ぶのを楽しみにしていることは、その笑顔を見れば分かります。

息子は現在3歳で、『こどものページ』が大好きです。また、ニューファイの物語のお芝居も好んで演じます。ニューファイの物語が大のお気に入りなのです。

『リアホナ』(スペイン語版)を読むと、親子の愛のきずなが強められます。また、「分かち合いの時間のためのアイデア」が毎月掲載されることにとっても感謝しています。そこに示された数々の活動を家族で行うとき、霊的で有意義なひとときを過ごすことができ、息子の証を培えるからです。

メキシコ、ツーラステーク、
 ツーラワード
 アナベル・ファレス・デ・メラ

良い習慣

『リアホナ』(英語版)を読んでじっくりと思い巡らす習慣を身に付けることは、わたしにとって祝福であり、それによって霊性が増し加えられます。この機関誌には、人生に欠くことのできない真実が記されています。そして、これらの記事から得た知識を実践しようと努めるなら、わたしたちの人生はさらに祝福されたものとなるでしょう。

フィリピン、モロング地方部、
 バガク支部
 ソニア・C・ゴメス



あかし 証を述べることの 大切さ

第二副管長
ジェームズ・E・ファウスト

今年の10月で、わたしが教会中央幹部に召されてから25年、また十二使徒に召されてから19年になります。その間の歳月にあったことについていろいろと考えてきました。また、この地上で自分の務めを果たす残された時間の中で、何をなすべく最善を尽くしたらよいかについても考えています。今年、わたしは自分に与えられている教える責任の一部として、自分のあかし証を述べるという点で特段の努力をするよう心がけています。別な言い方をすれば、わたしはこの1年を、証をするという点で特別な年にしようと努力しているということです。また人生の残りの毎年毎年を、証をする務めに関して、特別な年にしたいと希望しています。

その望みを念頭に置いて、わたしたち一人一人が証することの大切さについて述べてみたいと思います。わたしたちは言葉だけでなく、自分の行いを通して証をします。パウロがローマ人にあてたメッセージを引用したいと思います。「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救^{すくい}を得させる神の力である。」(ローマ1:16)

わたしの曾祖父^{そうそふ}ヘンリー・ジェイコブ・ファウストはプロシアのライン地方にあったヘデシェイムという小さな村で生まれました。曾祖父の家族は合



PAUL ON THE ROAD TO DAMASCUS,
BY FRANK SOLTESZ; USED WITH PERMISSION OF
THE PROVIDENCE LITHOGRAPH COMPANY

「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救^{すくい}を得させる神の力である。」
(ローマ1:16)

衆国に移住し、祖父のファウストは、一獲千金を夢見てカリフォルニアの金鉱地帯を目指して西へ進む旅の途中、ソルトレーク・シティーを通過しました。そしてユタ州内をさらに南へ下る途中、フィルモアという小さな町の井戸で足を休めました。そこで祖父は、エルシー・アン・アカーレーという若い女性に出会いました。祖父はこの教会の会員ではありませんでした。しかし祖父が会ったその若い女性は教会員でした。彼女は開拓者たちとともに、平原を横断してユタへ来ていたのでした。間もなく、二人は相思相愛の仲になりました。祖父はカリフォルニアへ行きましたが、結婚指輪を買うのに十分な金を得ると、それだけでフィルモアへ戻り、エルシーと結婚しました。

祖父が改宗してこの教会に加わったのは、宣教師によるものではありません。基本的には、フィルモアの井戸のそばで会ったこの若い女性^{あかし}の証によって改宗したのだと思います。祖父は後に、ブリガム・ヤング大管長から、ユタ州コリンズの最初の監督に任命されました。当時祖父は鉄道をユタまで敷設するための仕事に携わっていました。わたしは祖母エルシー・アン・アカーレーにも感謝しています。祖母はまだ若かったころに、ドイツからやって来たこの青年ヘンリー・ジェイコブ・ファウストに証を述べ、彼が改宗する助けをしたのです。

わたしたちはまた、それぞれの生活を通して証を述べています。第二次世界大戦中、わたしはペンシルベニア州の駐屯地に配属されていました。わたしたちはある小さなワードに属していました。そのワードにはステーキの祝福師もいました。彼の名はウィリアム・G・ストープスといました。ストープス兄弟はペンシルベニア州のウェンズバロという小さな町の機械店で働いていました。彼は周りの人たちから「おやじさん」と呼ばれていました。とても親切で、優しく、模範的なすばらしい教会員でした。彼に会った人はだれでも、その人柄を称賛しました。あるとき、彼と一緒に働いていた、教会員でない人がこのようなことを言いました。「わたしはモルモン教会のことはあまり知らない。宣教師に会ったこともないし、教えを勉強したこともない。モルモンの集会にも一度も行ったことがない。でもおやじさんのことは知っているよ。

モルモン教会があのおやじさんのような人を作るところだとしたら、いいところがたくさんある教会に違いないと思う。」わたしたちは、各自の模範が良くも悪しくもどれほど大きな影響力を持っているか、理解していないのではないのでしょうか。

ブラジル出身のエリオ・ダローチャ・カマルゴ長老はこの教会に入る前は、ほかの教会で聖職者をしていました。彼はある日曜日の朝青少年の集会を訪ねたときに、教会のことを熱心に調べていました。この教会の若人たちがどのようなことを話すか、強い関心を持っていました。一人の若い女性が、道徳的に清い生活をするのと、純潔の律法に従うことによって自分が得ている力について証を述べました。彼女やほかの若人の証はカマルゴ兄弟に非常に大きな感銘を与えました。そして彼は奥さんと一緒にこの教会の会員になりました。カマルゴ兄弟の証と献身ぶりはすばらしいものでした。主は彼を監督、ステーキ会長、伝道部長、地区代表、七十人会員、そして神殿長などの責任に召されました。

言葉で証を述べることは性格的にどうも苦手で消極的になってしまうという人もいます。しかしそのような消極性は持つべきではないようです。『教義と聖約』には次のように教えられています。「しかし、ある人々については、わたしは心から喜んではいない。彼らは口を開こうとせず、人を恐れて、わたしが与えたタラント^{けんそん}を隠しているからである。」(教義と聖約60:2)証は、謙遜な気持ちで述べる必要があります。教義と聖約第38章ではこう教えられています。「また、あなたがたの教えを説くことが警告の声となるように、各人がそれぞれ隣人に、穏やかに、かつ柔和に警告するようにしなさい。」(41節)

恐らくわたしたちは、人々の心に自分の証を伝えるのは御霊^{みたま}の力だということを忘れていた時があるのではないのでしょうか。わたしたちの証は自分自身で得たものであって、ほかの人から疑いを差し挟まれるようなものではありません。わたしたちにとって、証は個人的なものであり、真実なものです。しかし、それと同じ証をほかの人に伝えるのは、御霊なのです。

ロバート・L・マーチャントが、若いときにメキシコ伝道部で宣教師として働いていたころの話をしたことがあります。彼とその同僚は新しい任地に来たばかりで、



CHRIST APPEARING TO JOSEPH SMITH AND OLIVER COWDERY IN THE KIRTLAND TEMPLE, BY ROBERT T. BARRETT

ほかの宣教師たちはだれも彼らを知りませんでした。ある日彼らが宣教師として住んでいた地区に、姉妹宣教師が来て、ちらし配りをしました。若い長老たちは自分たちが宣教師であることを話さずに、その姉妹宣教師たちと福音について話し始めました。姉妹たちは相手も宣教師だということに気がつきませんでした。姉妹たちは福音の教義にあまり精通していませんでした。二人の長老は自分たちが宣教師であることを言わないまま、幾つかの教会の教えについて姉妹たちの考えを混乱させる話をしました。一人の姉妹がどうしていいか分からなくなって泣き始めました。しかし彼女は泣きながらも、簡潔に、また力強く、立派に自分の証を述べました。マーチャント長老とその同僚は心に強い衝撃を受け、自分たちのしたことを恥ずかしく思いました。その姉妹宣教師たちの簡潔な証が彼らに強く迫り、その心を深く貫いたからです。

イエスがキリストであり、世の救い主、仲保者、贖い主であられるということ、また、ジョセフ・スミスが神の預言者であるということを証するのは、わたしたちが行うにふさわしいことです。

わたしはこれまでの人生の中で、自分が何者であり、何を信じているかを隠そうとしたことは一度もありません。自分が教会員であることを謙虚に話すことによって、仕事に支障が生じたり、大切な友人をなくしたりするような経験をしたことはまったくありません。

わたしたちがどのような場合においても証するにふさわしい4つの真理の原則があります。

第1は、イエスはキリストであり、またこの世の救い主、仲保者、贖い主であられるという原則です。

第2は、ジョセフ・スミスは神の預言者であり、正当

な鍵^{かぎ}と権能とともに、キリストの教会をこの地上に再建したということです。

第3は、ジョセフ・スミス以後の歴代大管長は皆、その力と権能を継承してきているということです。

第4は、ゴードン・B・ヒンクレー大管長は、現在この世において教会のすべての鍵、力と権能を保有する唯一の神の預言者だということです。

主の特別な証人の一人として、わたしは皆さんに自分の証^{あかし}をお伝えしたいと強く望んでいます。これまで福音への証を常に持ち続けてこられたことに感謝しています。福音を信じなかったことは一度もありません。わたしはいつでもすべてのことを理解してきたわけではありません。それは今も同じです。しかし、神聖な使徒職への召しも含めて、これまでの人生の中で受けてきた数限りない霊的な確認を通して、イエスはキリストであられると皆さんに宣言することができます。わたしは自分の全身全霊をもって、イエスが救い主であり、贖^{あがな}い主であられることを知っています。ジョセフ・スミスがこの世に生を受けた預言者たちの中で最も偉大な預言者であること、また地上における神の業の中で、救い主にとって非常に重要な存在であったことを証します。わたしはそれが真実であると知っています。

ペテロの言葉を借りて、自分の証としたいと思います。

「それ以来、多くの弟子たちは去って行って、もはやイエスと行動を共にしなかった。

そこでイエスは十二弟子に言われた、『あなたがたも去ろうとするのか。』

シモン・ペテロが答えた、『主よ、わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言^{ことば}をもっているのはあなたです。

わたしたちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています。』（ヨハネ6：66-69）

わたしはすばらしい聖徒たちに主の祝福があるように願っています。また子供たちのうえにも主の祝福があって、家庭において偉大で簡潔な真理と福音が説く価値観を正しく学び取れるよう、主に祈っています。また教会の若人が主から祝福され、正しく誠実な生き方をし、忠実な人々のために主により用意されている偉大な祝福にあずかれるように祈っています。

また、教会の独身者にも主の祝福があって、皆さんが

自分は主にとって特別なすばらしい存在であると理解できるように祈っています。

子供の衣食住の必要を満たす責任を果たすために、日々奮闘している既婚者の方々に、主が祝福を下さるよう祈っています。また主が皆さんを支え、皆さんとともにいてくださるよう祈っています。これまでの人生の様々な困難に堪えてこられたご高齢の教会員の方々に主の恵みが注がれるように祈っています。忠実で献身的な生活を通して示してきた皆さんの模範の真価が認められるように願っています。

わたしたちすべてに主の祝福があり、わたしたちがキリストの「福音を恥」とすることがないように祈っています。それによってわたしたちがキリストの福音について謙遜^{けんそん}に証を述べ、またその教えに従い原則に添った生き方をするときに受ける喜びと恵みと力についてへりくだって証できるように祈っています。

ホームティーチャーへの提案

1. 「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救^{すくい}を得させる神の力である。」（ローマ1：16）

2. わたしたちは言葉だけでなく、自分の行いを通して証をする。

3. 主は次のように言われた。「しかし、ある人々については、わたしは心から喜んではない。彼らは口を開こうとせず、人を恐れて、わたしが与えたタラントを隠しているからである。」（教義と聖約60：2）

4. わたしたちは「穏やかに、かつ柔和に」（教義と聖約38：41）証するように求められている。

5. 人々の心に自分の証を伝えるのは御霊^{みたま}の力である。

6. 以下のことを証するのは、どのような場合においてもふさわしい。——イエスは世の贖^{あがな}い主であられる。ジョセフ・スミスは預言者であり、正当な力と権能とともに、キリストの教会をこの地上に再建した。ジョセフ・スミス以後の歴代大管長は皆、その力と権能を継承してきている。生ける大管長は、現在この世において教会のすべての鍵、力と権能を保有する神の預言者である。

「すべての国民……が祝福される」

救い主^{あかし}についての世界中の若人の証

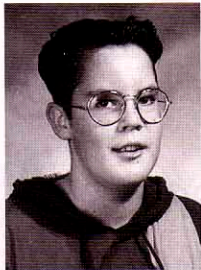
「全地の人々は主の救いを見るようになり、すべての国民、部族、国語の民、民族が祝福される。」(1ニーファイ19：17)

すべての国民に祝福をもたらすものとして、教会の若人の信仰と模範^{あかし}が挙げられます。

全世界から救い主に関する若人の証が届いています。ブラジルのスーエレ・アパレシダ・バルロスの証を紹介しましょう。「わたしは様々な機会に、喜びと感謝の気持ちに満たされ、限らない平安と調和を感じます。例えば、聖文を学ぶとき、教会に集うとき、『リアホナ』(スペイン語版)を通して預言者の声を聞くとき、人々の生活が変わっていく姿を目の当たりにするとき、聖霊を感じる^{あかし}ときです。また、わたしの生活に主が注いでくださっている数多くの祝福に気づくとき、キリストの大いなる犠牲とキリストを通して可能となった偉大な祝福について思いをはせ、神の深い憐れみと愛を感じる^{あかし}ときです。」

世界中の若人から寄せられたこのほかの証を次の2ページに掲載しました。話す言葉やそれぞれの文化は違っても、主の愛のすばらしさと回復された福音の真実性に関する彼らの証は皆同じです。





「救い主はわたしたちのためにたくさん^{あがな}のことをしてくださったと思います。わたしたちの罪を贖^{あがな}い、悔い改める力を授けてくださったのです。救い主は十字架^{あがな}上で死ぬことにより、わたしたちが天父とともに再び住めるようにしてくださいました。救い主の^{あがな}ことについて人々が証するのを聞くと、いつもすばらしい気持ちを感じます。」

合衆国、ネバダ州ラスベガス
ケニー・ロバートソン



「問題に直面する度に、イエス・キリストのことについて考えます。イエス・キリストはわたしたちの光であり、わたしたちの人生を完全なものとしてくれます。専任宣教師として自分の証をほかの人と分かち合う日がわたしにももうすぐやって来ます。それがわたしの人生をこんなにも大きな幸福で満たしてくださった神への感謝を示すいちばん良い方法だと思っています。」

メキシコ、ソノラ州
グアイマスリディア・アラセル・ソト・テルラサス



「ステーキ宣教師、専任宣教師として、イエス・キリストについて証をすることがどんなに大切かわたしたちはよく知っています。わたしはセミナーを通じて自分自身の証を培ってきました。イエス・キリストがわたしたちのために何をしてくださり、またどのように人々への愛を示されたかについて話していたとき、聖霊の力を強く感じました。もし救い主に仕えようと努めるならば、わたしたちも救い主のようになることができるでしょう。」

ベネズエラ、カラカス
ホアン・カルロス・ゴメス



「イエス・キリストの光がなかったら、わたしは生きてはいけません。イエス・キリストは、わたしのすべてなのです。イエス・キリストは平安の源であり、波打つ心を穏やかにしてくれます。主の力の及ぶ範囲は、実に壮大です。わたしはイエス・キリストを愛し、いつの日かまた主とともに住める日を辛抱強く待ちたいと思います。このすばらしい人生と福音の知識を与えてくださった主に心から感謝しています。」

ポルトガル、マデイラ、
フンシャル
マリア・セラフィナ・ファリア



「わたしは、全地における唯一の教会の会員としての特権にあずかっていることを天父に感謝しています。わたしはイエス・キリストを信じています。イエス・キリストがわたしの長兄であり、わたしを愛してくださっていることを知っています。わたしも主を愛しています。わたしの国ブルガリアの会員は皆、教会がこの地にあることに感謝しています。教会はわたしたちの生活にとって最大の贈り物です。主の教会は平安を感じられる場所、主イエス・キリス

トに対する自分の思いのすべてを、心を開いてほかの人々と分かち合える場所です。わたしは、救いの計画に感謝しています。救いの計画が示されたおかげで、この人生の目的、つまり救い主の贖い^{あがな}を通して自分を完全な者とするという目的を知ることができたからです。」

ブルガリア、ソフィア

ミナ・トドロバ・キリエオバ



「わたしは、イエス・キリストがわたしたちのために命を捨てられたこと、わたしの祈りを聞いてくださることを知っています。」

オマン、マスカット

ロウセル・カブレラ



「わたしは救い主イエス・キリストに対して、心からの証^{あかし}があります。イエスが生きておられ、わたしたちを愛しておいでになることを知っています。救い主の期待に添えるよう、一日一日を精いっぱい生きたいと思います。主がわたしのことを喜び、誇りに感じられるようにしたいのです。」

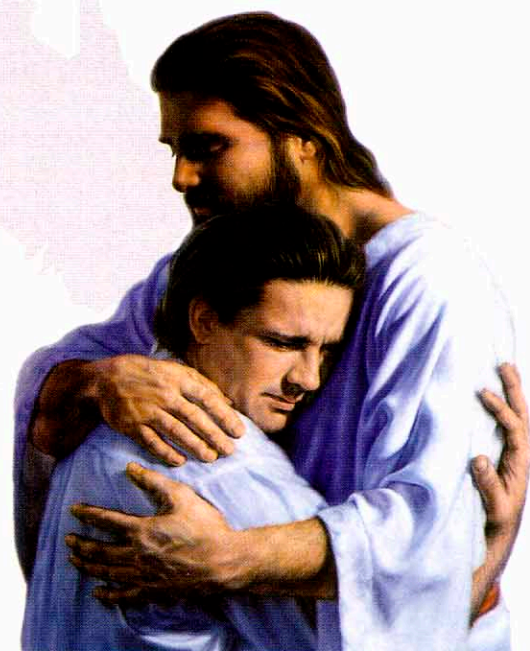
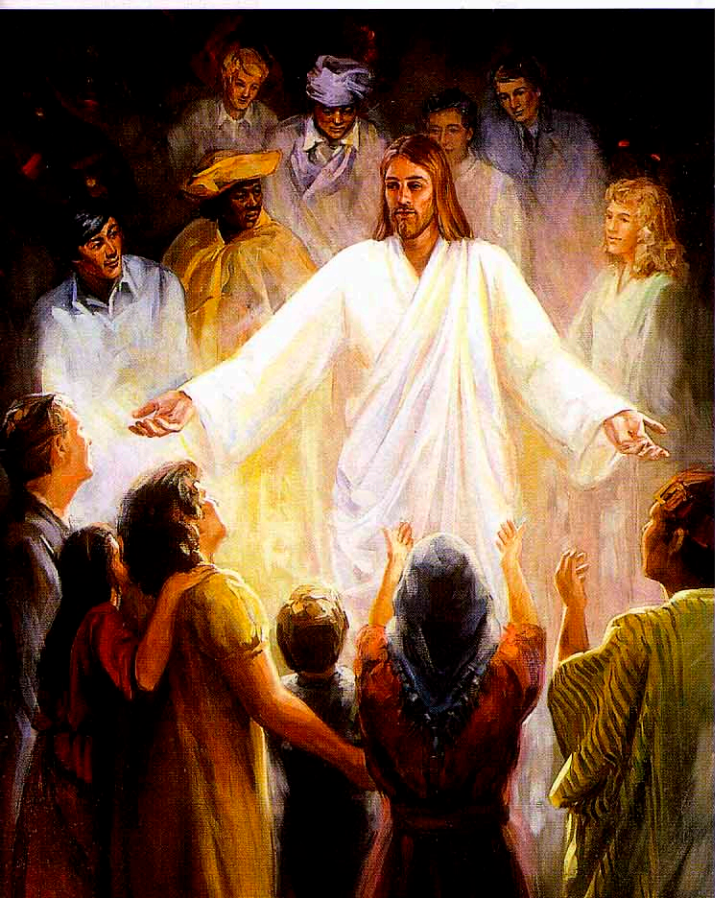
タヒチ、パペーテ

マカラニ・ティニラウアリー

□

「教会に入る前は、友人がつらい経験をしていても、ただ『かわいそうに』と思うだけでした。でも、教会に通うようになってわたしの生活は変わりました。自分の心の変化を実感してきました。そして、自分が少しずつ神の子としてふさわしくなっていくのを感じています。」

韓国、京畿道
キムコンスク
琴英淑



JOURNEY'S END, BY DEREK HEGSTED

天の近くで

ウィリー・ホルドマン(リチャード・M・ロムニーに語った話に基づく。)

さ あ、これから皆さんは、背中に大きな荷物をしょって、山登りとキャンプに出かけます。最高の旅にしたいですね。以下は、重要な持ち物のリストです。

- 温かい寝袋
- 履きごちのよい靴
- 軽い調理道具
- 聖文

そうです。最後に聖文を挙げたのは正解です。それこそ、ユタ州スパニッシュフォークのキャニオンワードの若者たちが昨年、学んだことです。彼らはワイオミング州とモンタナ州で最も美しい山々を登っただけでなく、荒野でのキャンプ生活の中心として毎日聖文を勉強したことにより、さらに高い頂きに登ることができたのです。

ジョン・オールダム (16歳) はこのように述べています。「前にも高い山へ登ったことはありましたが、今回は計画段階から、^{あかしかい}霊的な側面を特に強調しました。」

例えば、旅の最初に証会をしました。ヨシュア・クリステンセン (18歳) はこのように述べています。「とても素晴らしい会でした。みんなで座って、日が沈むテトン山脈を眺めながら、福音やお互いのこと、そして救い主について話しました。そこには^{みたま}御霊がありました。証会のおかげで、旅行中ずっと素晴らしい雰囲気が続きました。」

それだけではありませんでした。一行は毎日、礼拝集会とファイヤサイドを開きました。そして、毎日聖文に関するテーマについて勉強しました。

ダグ・トンプソン (15歳) はこのように説明しています。「朝、一つの聖句と一緒に読み、それについて幾つかの質問をします。その日はそれについて考えたり、実践したりします。そして、夜になると、自分が見つけた答えについて話すのです。」

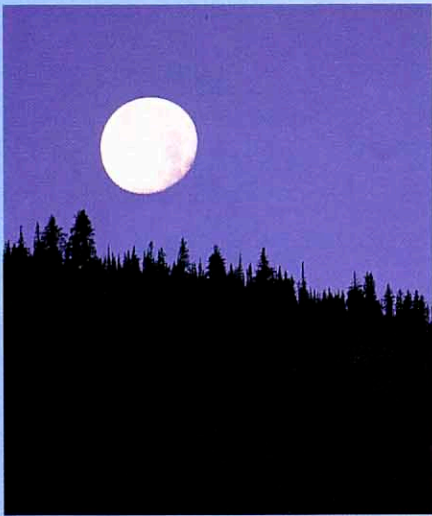
その結果、全員が聖句について話し、考え、その教えを実践したのです。

ダグは続けてこう語ります。「ぼくたちは祈りについて読みました。山登りをしている間、だれでも何かを求める時がありました。荷物が重く感じられたときは、力を増し加えてくださるように祈り、雨が降ってくれば、もう少し頑張っ



礼拝集会と聖文の勉強をしながら行った荒野でのキャンプは、主と主の創造物に対する若い登山家たちの愛を深めました。





歩き続けられるように祈ったのです。』

ジョー・オールダム（16歳）は、人を助けることについて話したある日の礼拝集会に感謝していることを、次のように述べています。

「その日、いとこのジョンとぼくは、山頂の湖に最初に着いたグループでした。ぼくはみんなの荷物の番をしました。ジョンはぼくの弟のマイク（14歳）が荷物を運ぶのを手伝うために下りて行きました。とても重かったからです。みんなが助け合っていました。」

アレックス・ライト（19歳、現在ブラジルで伝道中）はこのように述べています。「ある日、ぼくたちの薪が全部^{たきぎ}湿ってしまったとき、数人の兄弟たちが、乾いた薪を持って来てくれました。それは、奉仕について聖文から読んだ日でした。」

ライアン・ステッドマン（14歳）はこう回想します。「たくさん滝がありました。とても大きな滝で、水が岩の間を流れ落ち、辺りは霧で覆われていました。あまりにも美しい光景で、「どんなたかが創造された」と思わずにはいられませんでした。『すべてのものがわたしのことを証する^{あかし}のである』というモーセ書第6章63節を思い出しました。」

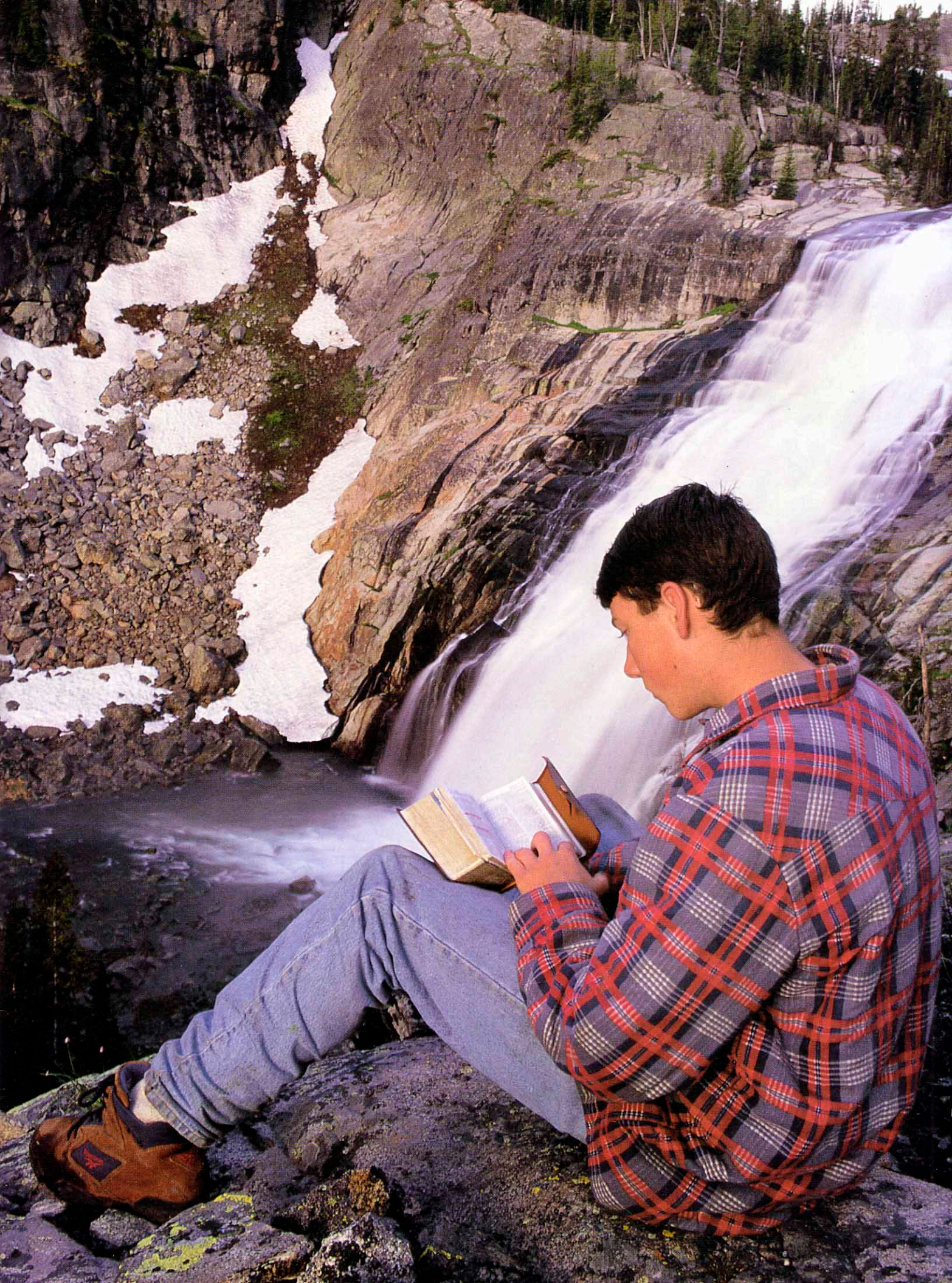
山登りとキャンプの間に学んだ教訓はほかにもありました。

ジョー・エリオット（16歳）はこのように述べています。「家では当たり前のことと思っていた祝福に感謝する気持ちになりました。荒野ではすぐ飲み水を得ることもできません。20分もかけて浄水器でこしてからでない^{みたま}と飲めないのです。」

ジョンはこう付け加えています。「だれでも、生きていくためには、いつもやっていることすべてが必要だと思うでしょう。野球をしたり、デートをしたり、一日中音楽を聞いたりなどです。でも、ここではこの世的なものがなくても生きていけるんです。そして、聖文を読むと、主が耳を傾けてほしいと思っておられることに、もっとよく集中できます。」

ヨシュアは次のように述べています。「ぼくたちの最初の礼拝集会は、『祈り』、つまり、『いつでもどんなことについても祈ることができる』というテーマで開かれました。みんな、この旅行中、祈りを欠かさなかったと思います。この旅行を通じて、御霊とともに歩む方法を学びました。ぼくは、箴言第3章5節から6節の次の言葉について、いろいろ考えました。『心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。』ぼくたちは肉体を使って山登りをしていましたが、ちょうどそれと同じように、霊的な山を登っているのだと思いました。」

雄大な景色に囲まれて、若者たちは「すべてのものがわたしのことを証する^{あかし}のである」（モーセ6：63）という主の言葉に思いをはせた。





若者たちは、雨や寒さ、山登りの肉体的なつらさも忘れ、靈的な瞑想^{めいそう}と分かち合いのひとときを過ごした。

この若者たちと話してみてください。この旅が忘れられない思い出となったことが分かるでしょう。毎日、雨がどのように降ってきたかを話してくれるでしょう。ちょうど予期していたときに降ってきて、前もって準備する大切さを学べたことが分かるでしょう。植物や動物を大切にすることが深まったこと、もっと多くを学びたいと望むようになったことも話してくれるでしょう。氷のように冷たい水に飛び込むこと、蚊にさされるのに耐えること、歩みの遅い人を捜しに戻ることにしても、楽しそうに聞かせてくれるでしょう。また、祈りに対する具体的な答えが与えられることについて、敬虔^{けいけん}な気持ちで語ってくれるでしょう。

しかし、彼らの話の中に必ずと言っていいほど述べられ、またこの夏の活動の思い出から決して切り離せないのは、主の言葉に対する深い愛と感謝の気持ちです。

次のマイクの言葉はそれを最もよく表しています。「だれでも山登りはできます。でもぼくたちはめったに得られない経験をしました。聖文に焦点を当てて旅したおかげです。」

それはまさに、山の上、つまり天の近くで行われた冒険だったのです。□

一步一步

以下は、次の山登りやキャンプを有意義なものにするために、皆さんにもできる事柄です。

1. 目標を心に描いて始める。どこへ着きたいか、地理的な目標だけでなく、霊的な目標を描く。聖文から学ぶ、などの神権者としての目的を持つ。全行程を霊的な雰囲気の中で進めるために証会で始めるよう考慮する。

2. 現実的な事柄に気をつける。忘れた物の代わりを探したり、食糧の不足をどうしたら補えるかを考えることに時間を費やす必要がなければ、もっと楽しい旅ができるでしょう。慎重な計画は、より楽しい思い出を作る助けとなります。

3. 毎日、霊性を高めるための工夫をする。毎朝、礼拝集会を開く。休憩時間に重要な聖句について皆で考える。個人の勉強と瞑想の時間を定期的に取り。得られた洞察を分かち合う。感じたことを日記につける。

4. 奉仕する機会を探す。あなたが行うように救い主から望まれていることをする機会を生かす。例えば、互いの重荷を軽くする、ほかの人のために乾いた薪を探す、迷い、疲れた人を捜すなど。

5. 祈ることを忘れないようにする。計画段階でも、山登りをしているときでも、天父に頻繁に語りかける。導きや教えを求める。また、感謝、特にすばらしい被造物に対する感謝を伝えるのを忘れないようにする。□

毎日、主の道を歩む

以下は、毎日グループで行う礼拝集会で用いる聖句や話し合いのアイデアです。

アルマ34：26-27「荒野でも、あなたがたの心を注ぎ出さなければならない。」聖文に記された、祈るために荒野へ出て行った人々と自分を比較する。祈りは主を身近に感じるうえでどのように役立つでしょうか。一日中祈りの気持ちで過ごすことは、感謝の気持ちを感じるのに役立つでしょうか。

創世1：26「神はまた言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造〔ろう。〕』」自分が神にかたどって造られたことを知って、どのような気持ちになりますか。神のすべての被造物への敬虔の念を示すために何ができるでしょうか。

モーサヤ4：16-26「わたしたちは皆、物乞いではないだろうか。」荒野では、生き延びるために皆が一緒に働き、助け合います。人を助けるために何をしたらよいでしょうか。人を助けたときは良い気持ちを感じますか。

モーセ6：63「すべてのものがわたしのことを証するのである。」わたしたちの身の周りで見聞きすることは、どのように創造主、イエス・キリストを証しているでしょうか。

モルモン8-9章 わたしたちへのモロナイの助言。独りになって、これらの二つの章を読んでください。もしあなたが自分の民の破滅を見る最後の一人になるとしたら、どんな気持ちがするでしょうか。あなたの言葉を聞く後世の人々に対して、どんな助言をしますか。モロナイは現代をどのように的確に描写していますか。□



生ける預言者の言葉

ゴードン・B・ヒンクレー大管長の教えと勧告



夫と妻は対等である

「〔兄弟の皆さん、〕皆さんの奥さんは、皆さんの永遠の進歩にとって、不可欠な存在です。わたしは、皆さんがそのことを決して忘れることのないよう、望んでいます。この教会の中には少数ですが、ある考え方をする男性が存在します。わたしとしては、それが多数でないことを喜びたいとは思いますが、間違いなく存在します。それは、『自分が妻よりも優れている』と考える男性たちです。そういう男性は、妻が対等の存在としてそのわきに立っているでなければ、日の栄えの王国において最高の階級に到達できないということを理解する必要があります。兄弟の皆さん、皆さんの奥さんは神の娘なのです。どうぞ、神の娘として大切にしてください。』¹

子供たちを義にかなって育てる

「皆さんのお顔を拝見し、現在、夫や妻、父親や母親である皆さん、あるいは将来、夫や妻、父親や母親である皆さんのことを思うとき、皆さんがこの世に特別な子供たちをもたらし、さらに、その子供たちを、忠誠と愛、信仰と信義をもって、義にかなって、また真理のうちに育てるという大きな特権にあずかっていることを考えずにはいられません。その世代の子供たちは、この世にあって、人々の心に大きな変革をもたらし世代になる可能性があります。今、世の人々は、全地に見られる汚れた泥沼に確実にハマり込もうとしています。皆さんが携わっているこの偉大で神聖な業を進めるに当たって、神が皆さんとともにいてくださいますように。』²

独身の皆さんへ

「わたしたちは皆さんの力を必要としています。また、皆さんの能力を、そして皆さんの証^{あかし}を必要としています。さらに、この主の業に進んで携わる精神を必要としています。信仰を持ち、真理に立ち、この御業^{みわざ}のために献身的に働いてください。生活に平安と幸福を見いだすのは、この道においてほかにありません。皆さんが福音の教えに従って生活するならば、平安と幸福が与えられます。それは、真理と命と理解の道なのです。』³

霊的な基盤を求めなさい

「〔世の人々にも〕たくさんの特長があります。しかし、神と復活された主に関する信仰と確信とを生きるよりどころにしているでなければ、危機に遭遇したり、証や信仰が試されたりするときに、大きな助けとなるものはあまり得られません。うわべだけのものではなく、本物を探し求めてください。一過性のつまらぬ物ではなく、永遠の真理を求めてください。今日ここにあって明日はなくなるようなものではなく、神にかかわる永遠のものを求めてください。』⁴

教会にいれば安全である

「愛する若い友人の皆さん、皆さん

の生活の中で、最高の安全を保証するのは、皆さんが末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であるということです。教会の教えから離れることなく、そこで学ぶ原則に従って生活してください。わたしは、ためらうことなく、皆さんに約束します。皆さんが幸福な生活を送り、重要なことを数多く成し遂げることができると約束します。さらに、ひざまずくのはなぜか、そして、主がこれまで皆さんのためにしてくださったことに対して感謝をささげるのはなぜか、その理由が分かるようになると約束します。皆さんは現在特別なすばらしい機会にあずかっていますが、それは主が皆さんに賜ったものなのです。』⁵

教会の使命

「この教会にあって、わたしたちが決して忘れてはならない大切なことがあります。それは、天父の業と栄光を打ち立てるためにその手助けをするという、最も重要で偉大な使命があるということです。つまり、天父の息子娘たちに、不死不滅と永遠の命をもたすことです。このことをわたしたちは心にとどめておく必要があります。それ以外のことは、どんなことでも、その使命を達成するための副次的、補助的なことにすぎないのです。』⁶

天父がわたしたちに寄せる望み

「わたしは天父がその子供たちの幸福な姿を見たいと望んでおいでになることを確信しています。惨めな状態ではなく、幸福になるよう望んでおられるのです。わたしはまた、義にかなった方法で獲得した地の良きものを、わ

たしたちが喜んで受け入れるよう、天父が願っておられることを固く信じています。……天父の子供たちが、貧困、苦痛、困難、邪悪、罪そして欠乏といった状態にいることを、天父が望んでおられるとは、わたしにはとうてい思えません。天父がその子供たちの幸福を願っておられることを、わたしは確信しています。』

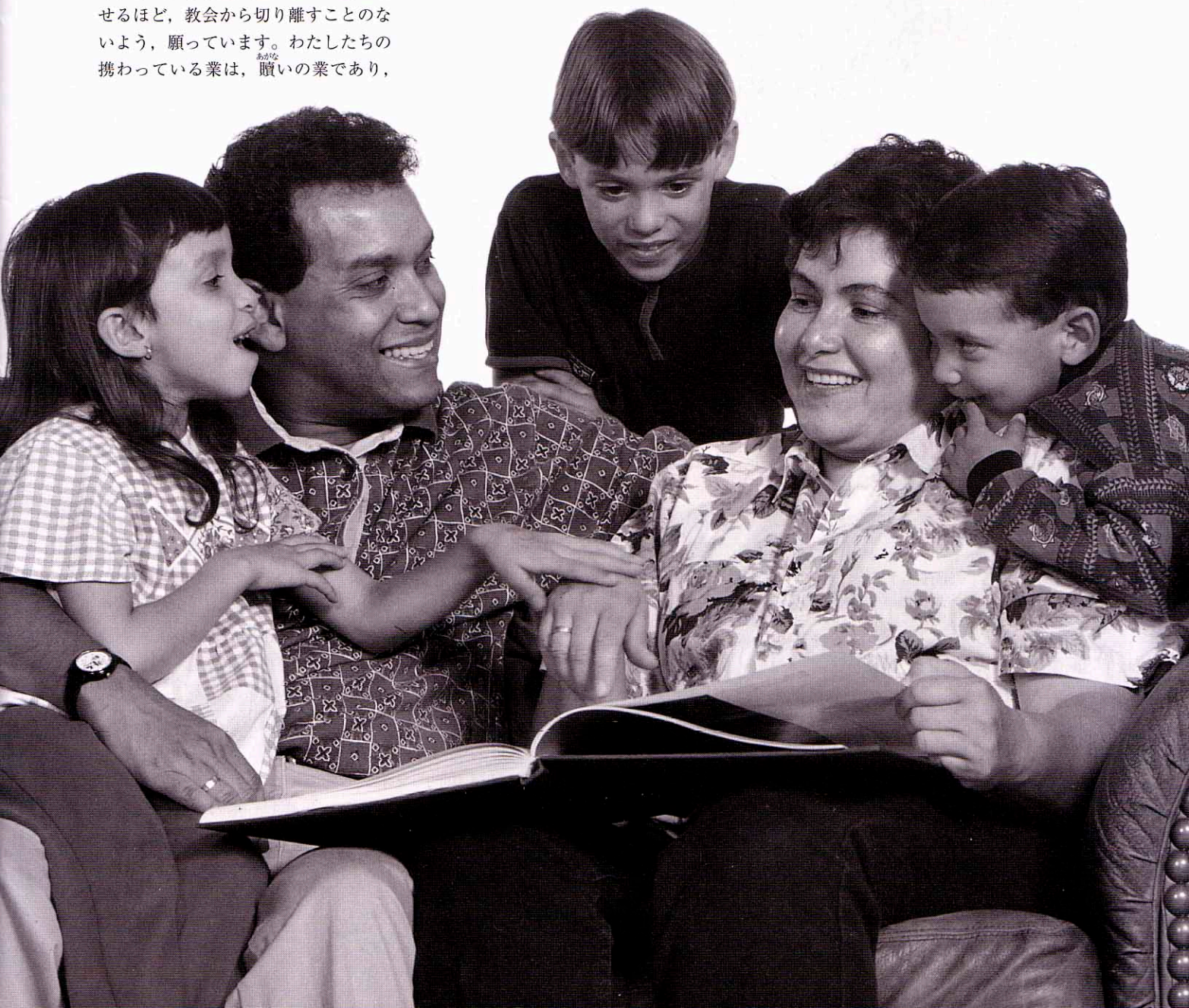
処分を受けた人々に手を差し伸べる

「わたしたちは、時として、宗紀上の措置を取らなければならないことがあります。わたしは、教会員がそうした処分を受けた人々のことをないがしろにしないよう願っています。そうした人々を決して見捨てることのないよう、また、もう戻る道はないと感じさせるほど、教会から切り離すことのないよう、願っています。わたしたちの携わっている業は、贖いの業であり、

救いの業です。また、人々を高めるために、そして、人生の困難なときにあつて道を見いだせるよう人々を助けるために、手を差し伸べる業です。ぜひとも皆さんにお願いします。皆さんのステーキに、ワードに、何か悩みを持って苦しんでいる人がいたら、まだ手を打てるうちに、養い育ててください。手遅れにならないようにしてください。そういう人たちが、『捨てられた』『忘れられた』『見放された』『切り離された』といった気持ちを抱くことのないようにしてください。これは非常に大切なことです。……どうぞ、助けを必要としている人々に、手を差し伸べてください。』⁸□

注

1. 1996年1月27日、メキシコ、ベラクルス地区大会神権指導者会
2. 1996年2月11日、ユタ州プロボのブリガム・ヤング大学で行われた既婚学生のための地区大会
3. 1996年3月3日、ソルトレーク・エミグレーションステーク、エミグレーション第2ワード^{モルモン}聖餐会
4. 1996年3月17日、テキサス州プレーノ地区大会
5. 1996年3月23日、カリフォルニア州ビスタ、青少年のためのファイヤサイド
6. 1996年4月1日、ユタ州ソルトレーク・シティー、管理監督会・教会実務部長・地域監督集会
7. 1996年4月14日、コロラド州コロラド・スプリングス、ヤングシングルアダルト集会
8. 1996年4月20日、ユタ州スミスフィールド・ローガン地区大会神権指導者会



ブリガム・ヤングの偉大な指導性を解く鍵^{かぎ}は、神への揺るぎない信仰にあった

炎の人、 ブリガム・ ヤング



ロナルド・K・エスプリン

フリガム・ヤングは偉大な実践の指導者として知られているが、それは正しい。同時代の人々も含めて彼を観察してきた人々は、ブリガム・ヤングを多才で判断力に優れ、常識を備えた人物であると評価している。1850年代にブリガム・ヤングのもとを訪れたフランス人の旅行家ジュール・レミーはこう言い切った。「卓越した政治家と有能な管理者に必要な特質を、彼ほどに高度に備えた人物はあまりいない。」¹

しかし、ブリガム・ヤングの成功が実践的な技術ではなく、神への信仰と内的な強さにあったことを見抜いた人はごく少数である。彼の信仰は、神は御心^{みこころ}を人に示される、ジョセフ・スミスは神の代弁者であり預言者である、神は人の営み^{みこころ}に御手を伸べられる、という核となる原則を土台としたものであった。ブリガム・ヤングは大胆に人々を導いた。それは自分の進むべき方向と行く末に確信を抱いていたからであった。

ブリガム・ヤングの生き方と人を導くことへの取り組み方は単純である。「わたしの宗教は神の御心を知り、それを行うことです。」² 彼は日々、自分への主の御心を知らうとした。今日の義務^{みょうぎ}は何かを尋ねたのである。そして、それを知るやいなや、持てるものをすべて集中し

てその実行に当たった。「自分について考えたときに一つだけ思い出せるのは、自分には勇気があるということです。何であろうと義務を果たします。」³ 義務を果たそうとするこの決意は、神の命を受けた人があらゆることを全力で行えば、残りは神が助けてくださるとの、彼の基本的な信仰の表れと言えよう。

しかし、彼がいつもそうした自信を持っていたかという、そうではない。福音に出会う前の彼の生活は暗いものであった。1801年6月1日にバーモント州で生まれたブリガムは、神への信仰は身に付けたものの、自分のあるべき姿を見いだすことができず、また人生の目的について疑問を持つことがしばしばであった。しかし、何か月もの求道と熟考の末、1832年に30歳でバプテスマを受けて教会の教えに改宗してから、彼の生活は一変する。彼自身の言葉を借りれば、突然「火がついたように」⁴ 自分を駆り立てる新たな目標と、改宗によって増した信仰をもって人生に立ち向かうようになったのであった。

そして1834年、シオンの陣営でその信仰を試されたブリガムは、ジョセフ・スミスと神と、神の僕である自分自身に対してさらに強い確信を抱くようになる。また1840年から41年にかけて、非常に困難な状況の下で十二



GARY E. SMITH

使徒たちとともにイギリスで伝道したときに、彼の確信はまた深まった。このイギリスでの経験は、ブリガム・ヤングとほかの使徒たちを強力なチームに変えていった。⁵ そして帰還後、預言者ジョセフから新たな責任を受けた十二使徒定員会は、それからの3年間、機会あるごとにジョセフから指導を受けることになる。

1844年、ジョセフ・スミスとハイラム・スミスの殺害により、ブリガム・ヤングは突如新たな指導者としての地位に押し上げられた。まだ喪に服した状態であった彼は、預言者としてジョセフの跡を継ぐことに躊躇したものの、自分たちに何が求められているかを理解していた。ブリガムと十二使徒たちはそれが「欠くべからざる義務」⁶であったことから、遅れることなく一步を踏み出した。指導者としての最初の数か月間、ならびに聖徒たちを安全なロッキー山中へと導く中で彼の行動は、主と預言者ジョセフから託された使命を達成するために、神が自分たちに授けてくださった才能を使うとの彼の考えを如実に示すものであった。

ジョセフ・スミスの死後、ブリガム・ヤングには優先順位がはっきり見えていた。つまり第1に、聖徒たちはノーブー神殿を完成してエンダウメントを受け、次に、預言された西部の安全な地に新たな住み家を求めなければならなかったのである。ブリガム・ヤングにとって、これらの目標には不退転の決意が必要であった。こうして、彼の熱意がほかの人々に伝わったため、ノーブー神殿の建設のペースは十二使徒会の指導の下、劇的に上昇した。

しかし皮肉にも、そうした急速な発展は敵の行動を刺激することになる。神殿が建ってからではモルモンをノーブーから追い出すことは不可能になると考えた敵は、神殿完成前に自分たちからモルモンを追い出すことを決めた。⁷ ……暴徒の襲撃が予測された1845年1月、ブリガム・ヤングは一時躊躇した。流血の事態になっても神殿は完成させるべきであろうか。彼の日記にはその答えが記されている。「ここに^{しか}どまって神殿を完成させるべきか主に尋ねた。答えは然りであった。」⁸

主からの確認を受けたブリガム・ヤングは、鉄のような決意をもって前進する。5月、かさ石が置かれ、十二使徒会は12月にエンダウメントを開始すると発表した。そしてそれは計画どおりに実行に移された。この間ブリ

ガムは強い言葉で説教を行っている。これは一部に、敵を委縮させ流血の事態を招くのを防ぐという意図が込められていた。彼のモットーは「誤ちを犯すよりも誤ちに耐える方がいい」⁹であり、彼の信仰は、主が方向を示してくださったのであるから、それに添って勇気をもって行動した結果については主が引き受けてくださるというものであった。

1845年9月、ついに暴動が発生した。しかしブリガム・ヤングは、イリノイ州最大の軍隊を指揮下に置いていたにもかかわらず、決して出動命令を出すことはなかった。逆に、彼とほかの使徒たちは、歴史家B・H・ロバーツが述べているように「教会における卓越した祈りの時期」¹⁰に入り、特別な祈りを熱心にささげるようになる。

一触即発の中で神殿建設の作業が進められていた1845年の春、ブリガム・ヤングの心は西部へと注がれる。ジョセフ・スミスが以前に個人的な話の中で、「遠く離れたロッキー山中に……聖徒たちのために安全な場所を備えること」¹¹について語っていたからである。そして殉教のわずか数週間前、ジョセフは使徒たちにその避難所となる地を探す業を託したのであった。

ブリガム・ヤングにとって、家や神殿を後に残すことは少しも犠牲ではなかった。聖徒たちの目的地はノーブーではなく西部であることを知っていたからである。ブリガムは、その西部の地で聖徒たちが力強い民となり、だれにも脅かされることなく新しい家と新しい神殿を建てられるようになることを信じていた。そして1845年9月のノーブー周辺の定住地への暴徒たちの襲撃を機に、ブリガム・ヤングは西部移住の長期計画を発表する。

ブリガム・ヤングにとって最大の懸念は、最適な場所を見いだすことであった。度重なる断食と神殿の自身の部屋での日々の祈りを通して、彼はその地を示現として見、心に刻みつけた。こうして彼は確信を得、移住への準備は万端整った。

それから1か月後、ブリガム・ヤング率いる先発隊は、まだ冬であるにもかかわらずミシシッピ川を渡った。そして一度この旅路に着くや、ブリガム・ヤングはまるで見えざる手に導かれるかのように西へ西へと進んで行った。アイオワの平原から弟のジョセフにあてて、彼はこう書いている。「家や家族を後に残すことを嫌がってい



1834年、シオンの陣営でその信仰を試されたブリガムは、
ジョセフ・スミスと神と、神の僕である自分自身に対して
さらに強い確信を抱くようになった。

ると……思ってもらいたくない。そんなことは決してない。……前途は洋々としている。しかし、（ノーブーの方を）振り返るとそこは暗い。」¹²

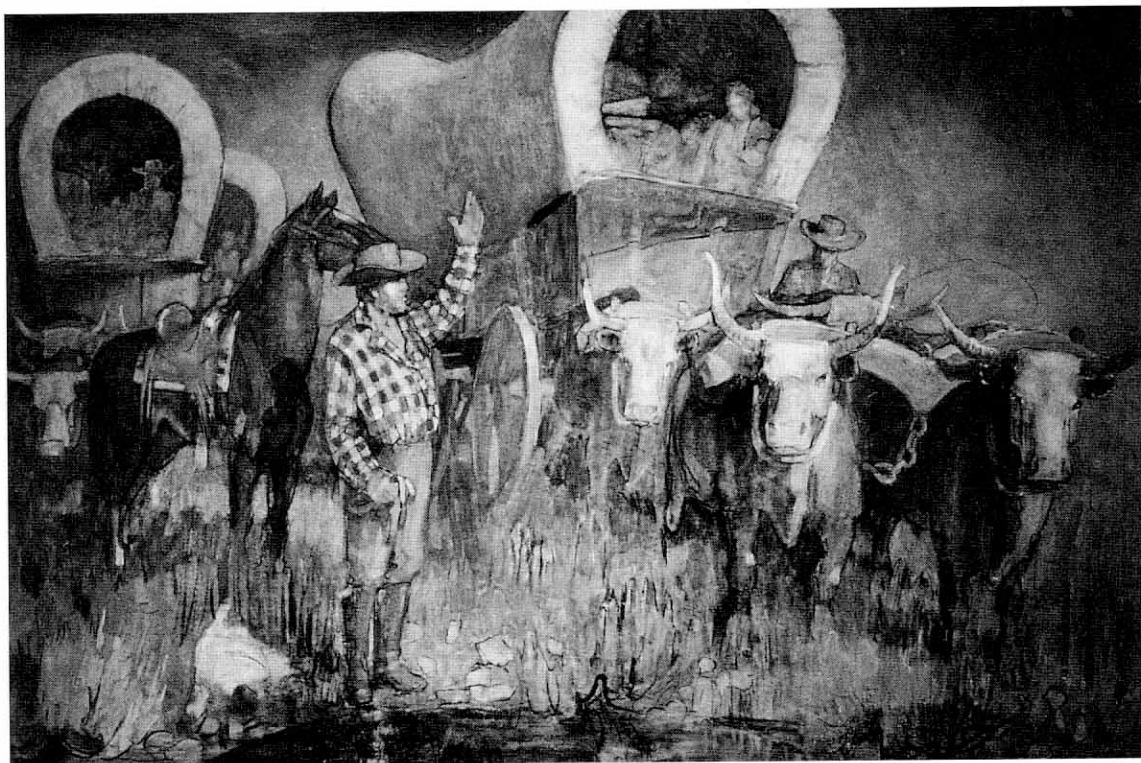
しかし、アイオワでの経験はつらいものであった。まるでアイオワのぬかるみに車輪が深く埋まってしまったかのように、一時教会全体が沈滞してしまう。何千人もの聖徒たちを率いて数百マイルもの距離を旅することは、ブリガム・ヤングの想像をはるかに超えた、遠く、しかも物入りな試みであった。この経験で力を使い果たした彼は、自分の能力の限界を思い知らされることになる。心労のために服がだぶつくほどにやせこけ、精神的にも肉体的にも疲労し切った彼は、以前にも増して神の御手を求めるようになった。また彼は、自分の相談相手となり民を安心させてくれるジョセフがいてくれたらと思った。

1847年2月17日の朝のことである。ベッドから出た彼を突然病が襲った。彼は「失神し、死んだようになった。」¹³ そのときの彼の心境は、一度死んで墓のかなたをかいま見た人にしか理解できないものであった。2週間後、ブリガムはこう語っている。「わたしが分かっているのは霊界に行ったということです。」しかし彼には、そこで

見た詳細をすぐに思い起こす力は与えられなかった。「わたしが覚えているのは、あのとき以来妻がわたしに話してくれていることだけです。妻の言葉によれば、わたしはこう語ったそうです。『わたしはジョセフとハイラムのそばにいたんだ。もう一度この世に戻るのはつらいことだ。』」¹⁴

命を取り戻したブリガム・ヤングはそのまま眠りに落ち、夢を見た。そして、その夢で見たことを起きてから記録している。「夢の中でわたしはジョセフに会いに行った。」ジョセフは大きな窓のかたわらのいすに腰を下ろしていたが、「普通の人間と変わりなかった。」ブリガムはジョセフの手を取って頬にキスをし、なぜ以前のように一緒にいてくれないのかと尋ねた。するとジョセフはいすから立ち、ブリガムを見て、いつもの調子でこう語った。「大丈夫です。」ブリガムは否定したが、ジョセフは答えた。「しばしの間、あなたは独力で事を進めなければなりません。それからわたしたちはまたともに働きます。」

ブリガムは、師であるジョセフに勧告を求めた。ジョセフの勧告の言葉は率直で簡潔なものであった。「主の御霊を保つように、忘れずに民に告げてください。」¹⁵ そ



BRIGHTON YOUNG PARTY AT THE WATER HOLE, BY MINERVA TECHERT

ブリガム・ヤングにとって、
ノーブーの家や建ったばかりの神殿を後に残すことは少しも犠牲ではなかった。
聖徒たちの目的地は安全な状態で町を築ける西部である、と知っていたからである。

それからブリガムが顔を上げてジョセフを見ると、ジョセフは光に包まれていた。ブリガムはこう書いている。「しかし、わたしが行かなければならない場所は夜の闇のようだった。」こうしてジョセフがブリガムに強く勧めたため、ブリガムは「暗闇の中に戻り」、目を覚ました。¹⁶

ロッキー山中に向かう前の数週間にわたり、ブリガムはこの経験について何度も語っているが、その意味について解説することはなかった。しかしこの経験は確かに、彼の霊の錨となり、彼が主の（ジョセフの）用向きを持てる者であることを重ねて示す証拠となった。指導者としての責任と山積する難問を抱えてはいたものの、ブリガム・ヤングの心は平安に満ちていた。

しかし、彼にとって最も親しい人でさえ、その心の平安を必ずしも理解していたわけではなかった。ブリガム・ヤングの病気と示現から2週間後、弟のジョセフ・ヤングが事務所を訪れ、「〔西部への旅の最低の量として発表された〕200ポンド（約90キロ）の食糧は、開拓者一人一人にとってあまりにも少なすぎると思うと言ってきた。」その数か月前、ジョセフ・ヤングはブリガムに、聖徒たちを安全にアイオワから脱出させるには、モーセ

がイスラエルの民を率いて荒れ野を進んだときのような大きな奇跡が必要だ、と話していたのである。同じ奇跡を期待していいのだろうか、と彼は言う。ジョセフ・ヤングが言いたいのは、そのような乏しい食糧では、何か事故が起きればすべての計画が水の泡になるということであった。しかし、ブリガム・ヤングにとってその量、つまり聖徒たちが手に入れなければならない量は、それで十分であった。「ブリガムは、それだけの量で出かけるだけの信仰のない者は、ここにとどまればよいと言った。」¹⁷ブリガム・ヤングは現実的な人物である。決して無謀な人ではなかった。最善を尽くした聖徒たちに残されているのは、主に頼ることだけであった。

ブリガム・ヤングは、そのような揺るぎない確信をもって難問に立ち向かった。それは、彼が行おうとしていることが自分の考えではないことを知っていたからである。それから約10年後、彼は聖徒たちにこう語っている。「主はこの山中に聖徒たちを送る方法を備えてくださいましたが、その企画をしたのはわたしではありません。」では、どなたが？「この民に救いをもたらしたのは、神の力です。」彼はそう主張してやまなかった。¹⁸

1847年にソルトレーク盆地に入った瞬間から、ブリガ

ム・ヤングには、聖徒たちがそこで何をすべきかについて明確なビジョンがあった。また、主の保護を受けて聖徒たちがその義務を達成できるとの揺るぎない確信があった。¹⁹ また彼は、ふさわしく生活すればもう二度とその地を追われない、と予見していた。²⁰ この信仰が彼を支え、長期にわたる市政ならびに教会の指導者としての奉仕の間、彼の判断に指針を与えるものとなったのである。

さて、1857年から58年にかけて、ブリガム・ヤングは信仰の厳しい試しを受ける。合衆国政府によりブリガム・ヤングに代わる知事として派遣されたアルフレッド・カミングが、数千人の政府軍に伴われてやって来たのである。このことについては、ブリガム・ヤングの方で直ちに政治的結着を求めるべきであったと主張する人々がいる。確かに、平和を維持する唯一の方法は、妥協して事態を受け入れることであったかもしれない。

しかし、ブリガム・ヤングの考えは違っていた。ミズーリでの聖徒たちの経験から、敵が軍当局と結びつくと危険であると知っていたのである。そこでヤング知事は、聖徒たちの方で全力を尽くしてすべてのことを行えば主が災いから守ってくださる、と確信して戒厳令を発動、準州軍を召集して流血以外のあらゆる手段を構じることにより政府軍の進攻を食い止めることにした。牧草地や備蓄用の荷車は焼かれ、食糧や家畜は奪われ、昼夜にわたり前衛隊の攻撃を受けたものの、時を得て訪れた豪雪のために、政府軍はソルトレーク盆地の定住地から約100マイル（160キロ）離れたフォートブリッジャーでの越冬を余儀なくされた。²¹

当然のことながら、政府軍の進攻がそれでやむことはなかった。春になると、政府軍は散々だった冬の仕返しをしようと躍起になっていた。こうして増員され、しかもさらに危険度も増した政府軍を前にして、ブリガム・ヤングは敵を迎える備えをするように命令した。しかし「発砲してはならないし、一人といえども殺してはならない」との言葉も付け加えた。彼の司令官の一人はブリガム・ヤングを主の代弁者と認めていたが、「その言葉が真実であることは分かっていたものの、信じられなかった」と述べている。どう見ても流血は避けられない状況だったのである。²²

こうして政府軍は市に進攻してきたもののブリガム・

ヤングと知事の指名を受けたアルフレッド・カミングは、命を賭して冬の間にユタに到着したトーマス・L・ケインの仲介により平和条約を結ぶこととなった。トーマス・L・ケインは教会員ではなかったが、聖徒たちに理解を示してきた人物である。こうして政府軍は無人と化したソルトレーク・シティーを何事もなく通過し、30マイル離れた地点に野営をした。合衆国陸軍大尉ジェス・ゴープは、このユタ戦争の損失についてこうまとめている。「死者、なし。負傷者、なし。ばかを見た者、全員。」²³ 全員ではなかった。ブリガム・ヤングはこの紛争の初めから終わりまで、事態が決して最悪の結果に至ることはない、と確信していたのである。

当然のことであるが、ブリガム・ヤングの指導は完全無欠なものではなかった。それは生身の人間には不可能である。あるとき彼はこう語った。「人には弱さがあり、わたしはそれを赦さなければなりません。わたしも赦してもらわなければならない者の一人です。よく誤ちを犯します。」しかし、こう続けている。「光が見える所では光の中にいるようにします。」²⁴ 彼が自分に与えられていると感じていた約束は、決して誤ちを犯さないとか、最良のものが何かを常に知っているといったものではない。そうではなく、主が最後には最も大切なことを与えてくださるというものである。彼は、効果のないものは直ちにやめて、効果のあるものに代えていった。しかしそのような中でも、方向性と行き着く先は不変であった。啓示に基づいた長期目標が日々の決定に統一性をもたらし、障害や誤ちをもものともせずに進進する自信を与えたのである。

そうした確信が、しばしばブリガム・ヤングを頑固な人物として映し出す。ユタ戦争の平和的解決の数か月後、ブリガム・ヤングはカミング知事と会談した。危機一髪のところで惨過を回避できたことについて、曲がったことが嫌いなカミング知事はブリガム・ヤングに、将来紛争の種になるような行動は起こさないようにと忠告した。

すると、ブリガム・ヤングはカミング知事の言葉を遮って、「閣下、お言葉ではありますが、私事に関しましては、この世に住むいかなる人の忠告も受けないことにしております」と言った。これは友人や彼を補佐する副の人々の言葉をはねつけるという意味ではない。当時の

ような危機的状況では、彼が信頼できるのは神だけだったのである。彼は真顔で知事に言った。「わたしの宗教は真実です。わたしは生きているかぎり、その原則に従うと心に決めています。」また、こう言明した。「わたしは天の御父の勧告に従います。そしてわたしには、その結果に喜んで従うという信仰があります。……」

そしてこう結んだ。「奇妙に思われるかもしれませんが、わたしのこの言葉が正しいことが後でお分かりになるでしょう。」²⁵□

注

1. ジュール・レミー、*A Journey to Great Salt Lake City* 『グレート・ソルトレーク・シティへの旅』2:495
2. *Journal of Discourses* 『説教集』14:118
3. 『説教集』5:97
4. 『説教集』1:90; 9:141; 16:69-70参照
5. ジェームズ・B・アレン、ロナルド・K・エスプリン、デビッド・J・ウィットカー、*Men with a Mission: The Quorum of the Twelve Apostles in the British Mission, 1837-1841* 『使命を託された人々——イギリス伝道部での十二使徒定員会(1837-1841)』
6. ブリガム・ヤングからパイレート・ヤングへ、1844年8月11日付け、ブリガム・ヤング文書、末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部文書課
7. *History of the Church* 『教会歴史』7:363
8. ブリガム・ヤングの日記、1845年1月24日付け、末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部文書課。表記のみ修正
9. 『教会歴史』6:241-242; ジョージ・D・ワット議事録、1845年4月6日、末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部文書課
10. 『教会歴史』7:xxix。詳細についてはロナルド・K・エスプリン “Brigham Young and the Power of the Apostleship: Defending the Kingdom through Prayer, 1844-1845” 『ブリガム・ヤングと使徒職の力——祈りを通して王国を擁護する』, Sidney B. Sperry Symposium, A Sesquicentennial Look at Church History 『シドニー・B・スピーリー・シンポジウム——150年後に見る教会歴史』pp.102-122参照
11. ジョナサン・バナム、トーマス・バーディックからジョセフ・スミスにあてた書簡への引用、1840年8月28日付け、ジョセフ・スミス・コレクション、末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部文書課
12. ブリガム・ヤングからジョセフ・ヤングへの書簡、1846年3月9日付け、ブリガム・ヤング文書、末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部文書課
13. *The Journals of John D. Lee 1846-47 and 1859* 『ジョン・D・リーの日記、1846-47、1859』チャールズ・ケリー編、1:90

14. *On the Mormon Frontier, the Diary of Hosea Stout, volume 1, 1844-1848* 『モルモンの開拓者、ホセア・スタウトの日記、第1巻、1844-1848』ジャンタ・ブルックス編、1:238。高等評議会の書記であったスタウトは、議事録の一部としてヤングの言葉を記録、次にそれを自分の日記に転写した。ヤング大管長がその出来事について後に語ったのを耳にしたジョセフ・フィールドینگの1847年の日記も参照

15. ブリガム・ヤング自筆文書、1847年2月17日、ブリガム・ヤング文書、末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部文書課。表記のみ修正

16. ホセア・スタウト日記、1847年2月28日付け。ブリガム・ヤングはその場にいた人々にこう語っている。「皆さんすべてにわたしの夢のことを覚えておいていただきたいと思います。なぜならそれは神の示現であり、ジョセフの霊を通して示されたものだからです。」

17. ウィラード・リチャーズ日記、1847年3月3日付け、末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部文書課

18. 『説教集』4:41

19. 初めてソルトレーク盆地を目にしたときのことを、彼は後にこう述懐している。「光の御霊がわたしに宿り、それから谷全体を包みました。わたしはここなら聖徒たちが守られ、安全に生活できると感じたのです。」*Manuscript History of Brigham Young 1846-1847* 『ブリガム・ヤング未完史、1846-1847』エルデン・J・ワトソン編、p.564

20. 翌春(1848年5月)、聖徒たちをロッキーマン山中に定住させたら、何をもってしても彼らをそこから追い出すことはできなくなる、という敵の恐れを言葉に耳にしたブリガム・ヤングは、同意してこう語っている。「聖徒たちは『自分で自分を追放しないかぎり』ロッキーマン山中から追い出されることはない。『わたしはこれを自分で宣言する。』『わたしたちは安全に生活し、……そこから王国にかかわる平和をもたらす事柄をすべての国々に宣べ伝える』という信仰を彼は持っていた。議事録、1848年5月14日、末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部文書課

21. *Utah's History* 『ユタの歴史』リチャード・D・ボール編、p.168

22. ブリガム・シティ議事録、1870年6月5日、ブリガム・ヤング文書、末日聖徒イエス・キリスト教会文書課

23. ジェス・A・ゴープ、*The Utah Expedition, 1857-1858; Letters of Captain Jesse A. Gove* 『ユタ遠征、1857-1858——ジェス・A・ゴープ大尉の書簡』オーティス・G・ハモンド編、ニューハンプシャー歴史協会所蔵、p.351

24. 議事録、1860年4月30日付け、末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部文書課

25. 教会歴史事務局議事録、1859年4月24日付け、末日聖徒イエス・キリスト教会歴史部文書課

信仰と忍耐

「ある人には……信じるのが許される」(教義と聖約46:13-14)

霊性を保つことは、イエス・キリストの神性に対する信仰をはぐくみ、それを行使できるかどうかにか大きく左右されます。それを行う方法は、一人一人異なります。ニール・A・マックスウェル長老は次のように説明しています。「わたしたちは皆……過程の中のそれぞれ違う地点を歩んでいるのではないのでしょうか。『ある人には……知ることが……許される。ほかの人には……彼らの言葉を信じるのが許される』のです(教義と聖約46:13-14)。」(「弱り果てて意気そそうしないために」『聖徒の道』1991年7月号, p.91)

わたしたちはイエス・キリストに対する信仰を深める過程にあって、ほかの人の証や模範に力づけられます。

「信仰をもって堪え忍び、
わたしの思うところを行う者は、
勝利を得[る]」(教義と聖約63:20)

150年前、末日聖徒の開拓者たちの信仰は並々ならぬ方法で試されました。ゴードン・B・ヒンクレー大管長

は、1837年にイギリスでバプテスマを受けた両親を持つエレン・ピューセル姉妹の話を語っています。19年間、アメリカへ移住するために貯金した一家は、マーティン手車隊の一員となりました。当時、エレンは9歳、姉のマギーは14歳でした。予想もできなかった遅れのために、マーティン手車隊は厳しい冬がやって来る前にソルトレーク盆地へ到着することができませんでした。

「マーティン手車隊の135人から150人が、あの悲しみと死の道の途中で命を落としていきました」とヒンクレー大管長は述べています。その中には、マギーとエレンの両親も含まれていました。「飢え、体力を使い果たし、衣服はぼろぼろになったこの惨めな状況の中で、彼らはようやく救援隊に発見されました。……

両親を亡くした二人の少女、マギーとエレンも手足が凍傷にかかっています。エレンは重傷でした。できるかぎりの努力をした医者は、最後に彼女の両足のひざから下を切断しました。手術の道具は粗末なものでした。麻酔薬はありませんでした。切断手術をしたその箇所は完全に治ることはありませんでした。彼女はやがて成人して、ウィリアム・アンサンクと結婚し、11人のすばらしい子供に恵まれました。彼女はその不自由な足をひきずって、家族や隣人、教会のために、信仰と喜

びをもって働きました。痛みから解放されることはありませんでしたが、不平は言いませんでした。彼女の子孫は数多く、その中には彼女が愛した主を愛し、彼女が犠牲を払った福音を愛する、高い教育を受けた有能な人々がいます。」(「人を救うわたしたちの使命」『聖徒の道』1992年1月号, p.62)

今日わたしたちは、イエス・キリストに対する信仰と、主の福音の実践における忍耐について貴重な模範を示してくれた気高い開拓者たちに感謝しています。

借りものの光では堪えられない

自分自身の証を築いていく過程では、ほかの人の証が信仰の架け橋となっていて、わたしたちの歩みを支えてくれることがあります。この架け橋は神からの祝福です。しかし、最終的には一人一人が自分自身の証を得なくてはなりません。そうでなくては、最後まで信仰をもって堪え忍ぶことはできないでしょう。ハロルド・B・リー大管長はこうに述べています。「わたしたちの第一の責任は、自分自身の改心です。……真の改心をしましょう。なぜなら、だれも借りものの光では堪えられないからです。」(Stand Ye in Holy Places『聖なる場所に立ちなさい』p.95)

●開拓者のように、子孫のために信仰の遺産を残すにはどうしたらよいでしょうか。

●ほかの人の信仰に満ちた忍耐によって、あなたはこれまでどのように強められましたか。

●信仰をもって最後まで堪え忍ぶためには、どうしたらよいでしょうか。□





騒音の中で

ジェンス・ジェンセン（ポール・コナーズに語った話に基づく。）

数年前、わたしはドイツのハーナウ市の音楽学校で理事長に任命されました。ある日、仕事の一環として楽器の展示会に出席しました。わたしは音楽家ではありませんが、数千点に及ぶ楽器を見て回りながら、一つ二つ、気の利いた質問を試みていました。

1階の会場を回っているとき、各展示品が防音の囲いの中に置かれているのに気づきました。恐らく、トランペットやコルネット、フレンチホルン、オルガン、ドラム、チューバなどを試す人たちが、バイオリンやクラリネット、ピアノ、フルート、オーボエ、サキソフォンを試している人たちの邪魔をしないようにという配慮からでしょう。実際のところ、防音というより「不完全防音」と言った方が適切な描写かもしれません。会場はまるで数組のオーケストラが一斉に楽器のチューニングを始めたような、ひどい騒音に包まれていました。

そのとき、「オーケストラ用楽器」という表示と2階を指す矢印が目に入りました。「助かった」と思いましたが、1階にあった楽器もオーケストラ用でしたから表示の意味には多少不明瞭なところがありました。それでも、わずかな平安と静けさを求めてわたしは階段を上りました。

ところがそこは、もっと多くの楽器が、しかもほとんどロック音楽用の楽器が並んだ、大きな部屋だったので。その部屋では、わたしが逃れようとしていた騒音よりもっと大きくて甲高い音があちこちから発せられていました。わたしは素早く最寄りの出口を探しました。

しかし、わたしはふいに足を止めました。ほんの一瞬、あの耳障りな騒音の中に美しいメロディーを聞いたように思ったのです。そんなことがあり得るのでしょうか。それとも空耳だったのでしょうか。

すると、またメロディーが聞こえてきました。実に美しい音です。騒音にかき消されそうになりながら、確かにバイオリンの曲が聞こえてきます。どこから聞こえてくるのかと辺りを見回してみました。ほかにも二人の人

がこのメロディーを聞きつけて、その源を探しているのに気づきました。

やがてわたしたちは探していたものを見つけました。ホールのいちばん小さなブースで一人の男性が静かに、美しくバイオリンを弾いていたのです。奥さんが近くに立ってそれを見守っています。その男性は、自分はスウェーデンのバイオリン職人で、エレキギターやシンセサイザーに囲まれながらも自分の作品を最善の方法で売ろうとしているのだと話してくれました。

「だまされたのですよ」と彼は悲しそうに言いました。「オーケストラ用楽器の展示場だと言うからここを借りたのに。」それから彼は再びバイオリンを弾き始め、わたしたちはうっとりとして耳慣れた曲に聞き入りました。周りの騒音は、もう耳には入りません。聞こえるのはバイオリンの美しい音色だけです。

それからしばらくして、わたしは大勢の話し声が行き交う混雑した部屋にいました。再び多くの耳障りな音の中から何に耳を傾けるべきか選択しなければなりません。今度は美しい音楽は聞こえませんでした。しかし突然、「人は、人生でもしばしば多くの声に取り囲われているのだ」という考えが浮かんできました。中には「明日は死ぬ身なのだから、飲み食いし、楽しみなさい。そうすれば、わたしたちは幸せだ」（2ニーファイ28：7）というような誤った思想を唱道する声もあります。また、何か目新しい考えを試してみるよう、騒々しく声高に誘惑する声もあります。例えば、ほんとうは昔から存在した不道徳に過ぎない事柄を、新しい倫理観として捉えて、試させる風潮がそうです。

しかし、そんな騒々しい相反するメッセージのただなかにあっても、もし注意深く耳を傾けることを選ぶなら、天からの静かな声を聞くことができるでしょう。そして、御霊の静かな細い声は、見事に演奏されたバイオリンの美しいメロディーと同様、現実のものであると分かるでしょう。□





信仰の翼に のって

ビキ・A・グロバーグ
ILLUSTRATED BY GREG NEWBOLD

家族と一緒に、アルゼンチンのブエノスアイレスから、アルゼンチン北部にあるボサダスという町に向かって飛行機で旅行した時のことです。当時わたしは15歳で、それ以前にも飛行機に乗った経験はあったのですが、あれほど小さい飛行機は初めてでした。50人ほどの乗客を載せたその飛行機は、間違いなく製造後50年ほどたっているような代物でした。墜落するのではと思うと、身震いしましたが、わたしはその考えを頭から払いのけました。飛行機もわたしと同じように少し震えていました。しかしわたしは家族と一緒にだったので、何とか落ち着いていられました。

大きな湖の上空に差ししかかったころ、飛行機は振動し始め、揺れはかなりひどくなりました。すると、それまで頭の片隅に押しやっていた恐怖心が、突然わたしの心に襲いかかりました。わたしは目を閉じ、ほとんど本能的に、祈り始めました。何か問題があったら常に祈るように教えられてきたからです。

わたしが天父に守ってくださるよう祈っていると、何もかもうまくいく、という穏やかな確信が生まれました。まだ朝早い時間でした。目を開けて窓の外を見ると、わたしが祈っている間に太陽の光が湖を照らし、空と水面とを深い青色に変えていました。そして、空に浮かぶ雲の群れが、水面にもその姿を写していたのです。この光景は、それまでに見た中で最も美しいものでした。恐れは去り、それまでは飛行機の揺れる原因としか思えなかった雲が、まるで天父の愛に満ちた腕のように思えてき

ました。

「大丈夫だ」、という確信を抱いたわたしは、湖や空を細かく観察し始め、その両方にいつでも起こり得る大暴風雨について想像を巡らしました。わたしは自分自身の人生についても考えました。わたしも、毎日様々な問題に、言い換えれば嵐に、追われるような生活をしてきたのです。

わたしは生まれてからずっと教会員として過ごしてきましたが、天父の大きな影響力をそれほど強く感じて生活してきたわけではありませんでした。でもそのとき、確かに天父が世の嵐から逃れる道を備えてくださっていることを知りました。祈ることにより、また鉄の棒にしっかりとつかまることにより、嵐から抜け出して、天父の愛を感じられるような霊の高みにまで到達できることを実感したのです。

わたしは祈りの方法を教えられた幼いころからずっと、自分の祈りが聞かれているということを悟らぬまま、毎日祈り続けていました。しかしあの日、アルゼンチンの空の上で、一つの素朴な祈りがわたしの目を開かせてくれました。あの新しい目覚めは、単なる出発点でしかなかったかもしれません。しかしその出来事がきっかけとなり、天父がわたしをいかに深く愛してくださっているかを理解できるようになりました。そしてあの経験以来、様々な方法を通して、天父が確かに生きておられることを知り、また、祈りにより絶えず天父を呼び求めなければならないことも学んできました。□

息子が耳を傾けるとき

匿名

悪夢は1本の電話で始まりました。電話の優しい声の主は、わたしの15歳の息子が麻薬と酒に手を出していること、しかもかなり長い間その状態が続いていることを告げました。わたしは大きなショックを受けました。

夫とわたしは息子を郡の保健所に連れて行き、麻薬検査を受けさせました。その結果、息子の血液中の麻薬含有量は、同種の麻薬では保健所始まって以来という高さを示しました。そして週末、地元のリハビリセンターに入院させました。6週間後に息子が退院したとき、わたしはこれで悪夢は終わったと思いました。しかし、それはほんの始まりに過ぎなかったのです。2か月後、息子はマリファナ所持および売買の容疑で、学校にいるときに逮捕されました。年月がたち、麻薬乱用、逮捕というパターンが何度となく繰り返されました。わずか1年で10回も逮捕されたこともあります。そしてとうとう、6か月の実刑判決を言い渡されてしまいました。

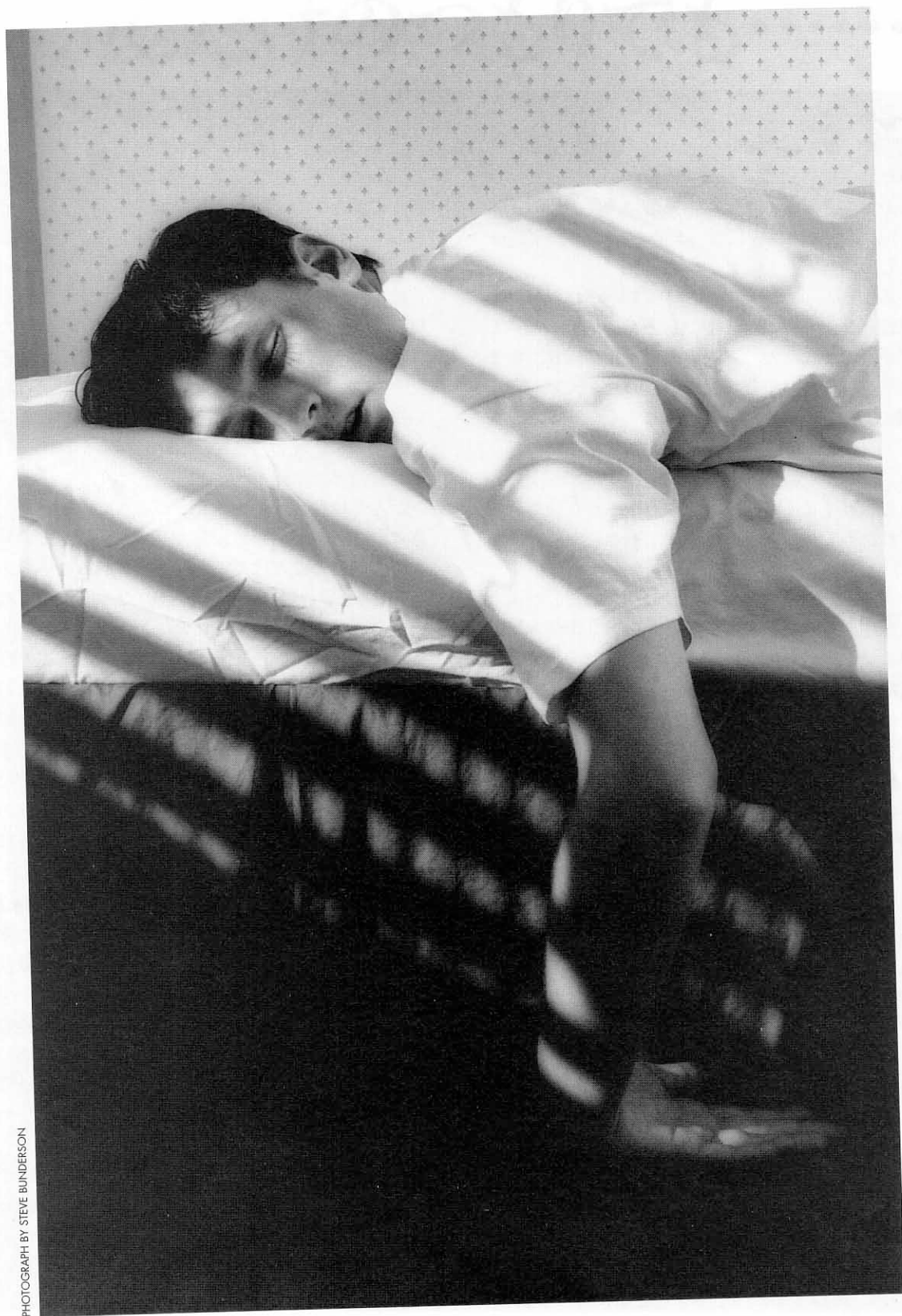
毎週日曜日、わたしたち夫婦は息子の面会のため刑務所に行ってから、当時町に建設中だった神殿まで車で行きました。そこに腰を下ろし、よく涙したものです。「どうしてこんなことになってしまったのでしょうか」と。

わたしは息子のために頻繁に祈りました。いつも神殿の祈りの名簿に彼の名前を記しました。断食日だけでなく、日曜日ごとに息子のために断食しました。釈放後、離れて住んでいたときは、月曜日ごとの夕食と特別な家族の活動には欠かさず息子を招待しました。

あるとき、息子の尊敬するだれかがその人生に影響を与えてくれるように祈ろう、という思いに駆られました。祈っていると、かつて息子の初等協会の教師だった、警察官をしているある兄弟の名前が頭に浮かびました。そ



ある月曜日の朝祈っていると、息子に特別な夢を見させてくださるよう天父に願い求めるべきだ、という気持ちを強く感じました。なぜなら、息子がじっと耳を傾けてくれるのは眠っているときだけだったからです。願い求めるべき具体的な言葉がゆっくりと頭に浮かんできました。わたしは驚きました。「この霊的な促しを自分は正しく解釈しているだろうか」と疑ったほどです。わたしにそんなことができるでしょうか。



PHOTOGRAPH BY STEVE BUNDERSON

れから間もなくして、ステーキ大会でその人を見かけました。わたしは彼に息子のことと、わたしが祈ったときの経験について話しました。その兄弟は、何のためらいもなく、「息子さんに会いに行ってみましょう」と言うてくれました。

それから2日後、ミシンの前に座っていたわたしの頭に、警察官の彼がある部屋の中で息子を抱き締めている情景が浮かんできました。二人の顔には涙が流れていました。時計を見ると、午後2時15分でした。その夜遅く、彼から電話があったとき、わたしはこう伝えました。「あなた、午後2時15分ごろ、息子と会ってくださってたでしょう。」彼は「確かにうかがいました」と告げました。わたしが行くこともできず、歓迎もされない場所に行ってくれたのです。わたしは感謝で胸がいっぱいになりました。

そのとき以来、わたしは力強い霊的な自信で心が満たされるのを感じました。また、わたしの祈りが聞き届けられていること、そして信仰深く熱心に努力を続ければ大きな霊的祝福が得られることを知りました。

ある月曜日の朝祈っていると、息子に特別な夢を見させてくださるよう天父に願い求めるべきだ、という気持ちを強く感じました。なぜなら、息子がじっと耳を傾けてくれるのは眠っているときだけだったからです。願い求めるべき具体的な言葉がゆっくりと頭に浮かんできました。わたしは驚きました。「この霊的な促しを自分は正しく解釈しているだろうか」と疑ったほどです。わたしにそんなことができるのでしょうか。しかし、その後二度も同じ霊的な促しを受け、ようやくそれに従うことにしました。ひざまずいて祈りながら、息子が「自分のすべての罪をはっきりと思い出し（アルマ11：43）、罪の重荷を感じるように、しかしすぐに、救い主が彼を愛し、戻って来るよう望んでいらっしゃることを悟れるように、と願ったのです。

時がたちました。そしてある夏の夜遅く、息子が家に戻って来ました。彼は歓迎されるかどうか不安で、戸口に立っていました。やがて、監督と話してきたことと、伝道に出たいと思っていることを告げました。わたしは駆け寄って彼を抱き締め、ともに涙を流しました。それからの2時間、彼は今まで感じてきた心痛について語り、わたしたちの赦しを請いました。

以前の息子の行為に深く傷ついていた夫は、初めは半

信半疑でした。何時間も話した後で、息子は手を伸ばして父親のひざの上に置き、「父親の祝福」をしてくれるように頼みました。夫の目に涙が浮かび、その心が一瞬にして和らいでいくのが分かりました。わたしはその夜二つ目の奇跡を見たのです。

それからしばらくして、息子はある指導者会で教会に戻って来た経緯について話すように頼まれました。指導者会当日、彼は立ってこう言いました。「ある夜、夢を見たんです。夢の中で自分のすべての罪をはっきりと思い出しました。罪の重荷を感じましたが、すぐに、救い主がわたしを愛し、戻って来るよう望んでいらっしゃる、と悟ったんです。」

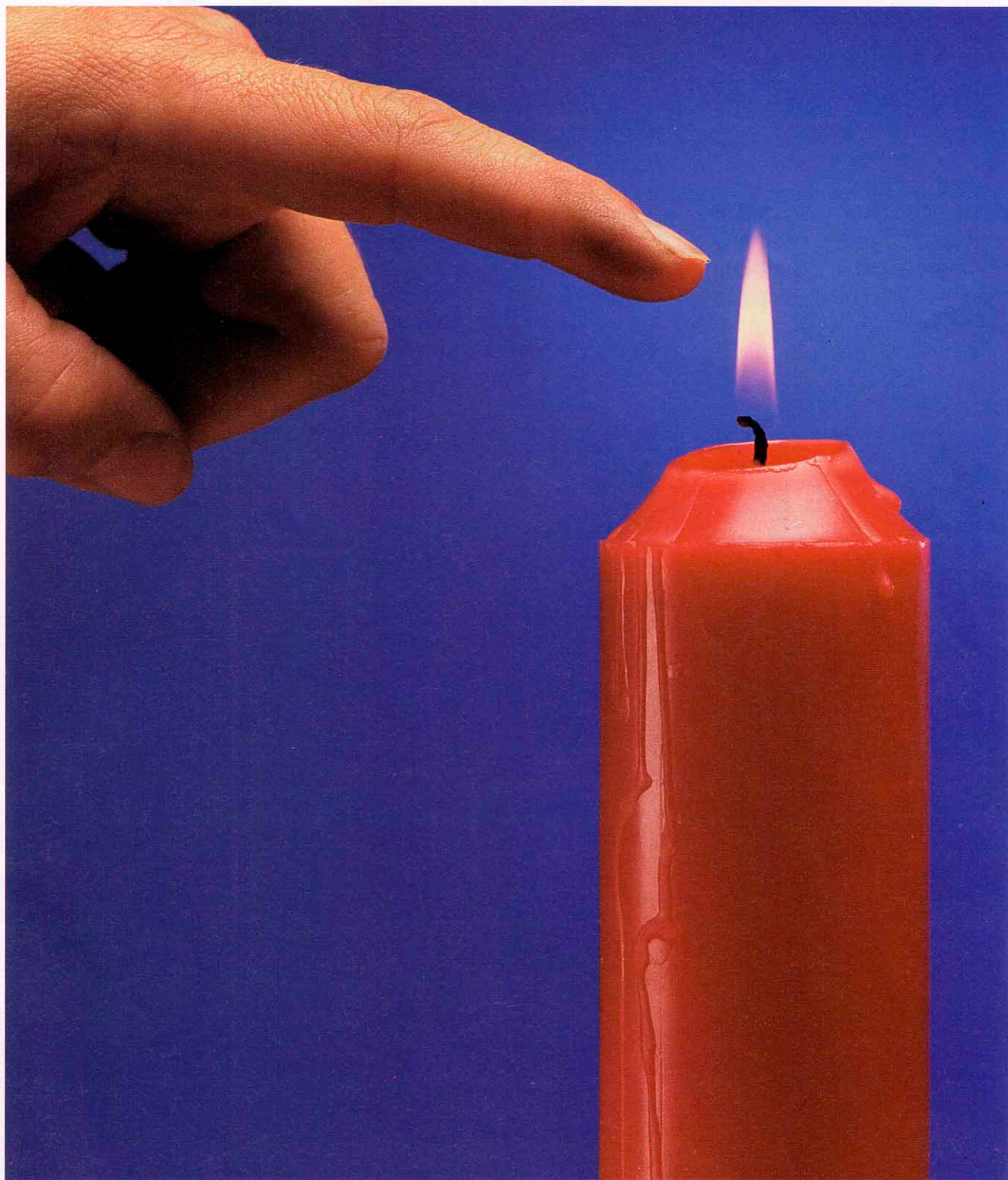
わたしは涙をとどめることができませんでした。そのときわたしは、天父がわたしの心からの断食と祈りにこたえてくださっただけでなく、その憐れみ深い知恵をもって、「何を願うべきか」までもわたしに優しく教えてくださったことを、かつてないほど強く確信しました。

それから1年半が過ぎ、息子はついに伝道の召しを受けました。聖餐会には500人近い出席者がいました。ハワイからも友人たちが駆けつけてくれました。彼らは自ら編んだ緑色のレイを持って来て、聖餐会の始まる直前に息子に贈りました。彼らは、このレイが戦いに勝利を収めて凱旋してくる戦士たちに村人が贈ったものだと言明し、お話をするとき首にかけてくれるように頼みました。

しかし、話をするために立ち上がった息子の首にレイはありませんでした。わたしは友人たちががっかりするのではないかと心配しました。しかし、話の最後に息子はレイを取り出し、それにまつわる伝統について説明しました。「わたしは自分のことを、真理のための戦いに今まきに出発しようとしている戦士のように感じています。でもここには、困難な戦いに挑んで勝利を収めた真の戦士がいます。」息子はそう言う、わたしの方を向き、わたしの手を取って自分の横に立たせました。そして、優しくわたしの首にレイをかけてくれたのです。

シオンの親として、わたしたちには、天父の助けを受け、迷える子供たちに手を差し伸べて連れ戻す大いなる力が与えられています。そのことをわたしは確かに知っています。「むすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」経験をしたからです。（ルカ15：24）□

一度だけのつもりでも……



PHOTOGRAPH BY STEVE BUNDERSON

罪をもてあそべば、やけどをします
(教義と聖約1:31-33参照)。

夢がかなった、 ホ ン コ ン 香港の聖徒たち

ケリー・リックス・アダムス

HONG KONG TEMPLE PHOTOGRAPH BY CRAIG DIMOND

PHOTOGRAPH OF HONG KONG SKYLINE YOICHIRO MIYAZAKI / FPG INTERNATIONAL CORPORATION



香港神殿の奉献式に集まった聖徒たちは喜びに満ちあふれていました。彼らの多くは、香港に主の宮が建てられる日が来るとは夢にも思っていませんでした。

5 歳になるジル・ラムは母親から食事の祝福をするように言われると恥ずかしさのあまりくすくす笑いだしました。それまでお客さんの前で祈りをする機会がほとんどなかったからです。けれども彼女はおずおずと

立ち上がると短い祈りを始めました。

ジルは知らない人が家に来ていたため、気恥ずかしい思いがして言葉が出てきませんでした。それでも小さな声で祈りを始めました。「この食べ物



を感謝します。どうか祝福してください。」

ジルはそこで口ごもってしまいました。実はお祈りを早く終えたかったのですが、この1年間家族でお祈りをする度をお願いしてきたことを言わなければならないと感じたからです。「そして、天のお父様、神殿が早く完成しますように、わたしたちがふさわしく生活して、いつか神殿に入れますように祝福してください」と一気に言ってお祈りを終えました。

1992年10月、当時大管長会の第一副管長だったゴードン・B・ヒンクレー長老は、香港に神殿が建設されることを発表しました。ジルの心を込めた祈りは、その発表以来、香港に住む多くの教会員が祈りの度に口にしてきた思

いでした。そして彼らの祈りはついにかなえられました。ヒンクレー長老が大管長として、1996年5月26日と27日の両日にわたって、香港神殿を奉献したのです。

東洋の真珠

東洋の真珠と呼ばれる香港はイギリスの領土となっており、真珠川の河口地域、中国本土の南東海岸に位置しています。このユニークな地域には600万以上の人々が住んでいます。中国は約100年前に中国本土の一部である新界と呼ばれる約960平方キロの地域をイギリスに対して99年間の契約で貸与しました。こうして、この租借地が誕生したのです。イギリスはそれ以前に

中国と交わした条約によって香港島と九龍半島にまたがる合計90平方キロの土地を取得していました。この地域が香港と呼ばれるようになったのです。イギリスは当初、世界で最も水深の深い自然港を持つこの地域を中国との貿易の窓口として使用していました。東洋の真珠が国際貿易と金融の中心地として発展したのはその後のことです。

今年、1997年7月1日に99年間の借地契約が満了するため、この小さな真珠と呼ばれる香港は中国に返還されます。こうして、一つの時代が終わり、新しい時代が始まります。香港は約600万人の住民とともに、中国に併合されることになります。その中国では、10億人以上の人々が各省や市町村に住んでいます。



永遠を見据える

ホンコン

香港の聖徒たちは世界中の末日聖徒たちと同じように、主に対して従順であろうと努め、祈り、聖文を読み、人々に仕えようと努力しています。しかしながら、彼らは中国文化独特のチャレンジに遭遇しています。香港に住む大多数の人々は仏教か道教の信者です。つい数年前まで、香港の多くの中国人はイエス・キリストの名前すら聞いたことがありませんでした。

中国人の聖徒が直面するもう一つのチャレンジは時間的に窮屈な生活を迫られていることです。子供たちは3歳から学校に通い始めます。そして高校を卒業してさらに進学するには猛烈な競争を強いられます。多くの学生は平日の夜でも3時間から5時間、週末には

さらに多くの時間を勉強に充てています。

就職しても、香港の多くの人々は週に6日働きます。週に7日働く人も珍しくはありません。香港の経済は成長していますが、生活を安定させ、必需品を手に入れ、会社でより高い役職に就くことがいまだに最大の関心事となっています。

しかし中国人の会員たちは、永遠に大切な事柄の原則を教える福音を通して、物事をどのように考えたらよいかを教えられています。将来に関して不確定要素の多い環境に置かれながらも会員たちはこのような理解を持つことによって平安と導きを得ています。

香港における教会の歴史は比較的浅いため、会員の大半は第1世代の改宗者です。さらにこれらの会員の多くは

家族で自分だけが教会員であるため、孤独感を覚えています。彼らは、この地と自分の家族における開拓者として一致協力し、強め合っています。

リンダ・チョイとキャッスル・チェンはそのような意味での開拓者です。二人は香港神殿で最初に結婚した夫婦です。チェン兄弟は街頭で伝道していた宣教師に呼び止められたのがきっかけで6年前に改宗しました。彼は両親をはじめとする自分の家族をととても大切にする人でした。そして宣教師からのレッスンで教えられたように家族の関係を永遠に続くものにしたいと考えました。けれども家族のだれ一人として彼が見いだした真理に耳を傾けようとはしませんでした。

チェン兄弟がリンダと出会ったのは3年半前のことです。リンダは福音を



PHOTOGRAPH BY CRAIG DIMOND



左端——^{ホンコン}香港神殿の日の栄えの部屋。左——トム・ヨク・キウン、トム・リ・チャン夫妻と子供たちのマン・チョウ、シオー・アオ（乳母車の中）。下——セミナリーの生徒セク・ワイ・ツェとホー・セシリア。36ページ——香港トロハーバー・ステーキ、トロハーバー第1支部のグン・ジョウ支部長。

学び、キャッスルと一緒に教会に集うことを承知しました。「わたしはキャッスルの家族に対する姿勢に最初から心を打たれていました。物やお金、財産に心を奪われている人がほとんどの中で、彼はまったく違う人でした。ほんとうに大切なことだけを考える人でした。キャッスルは時々家族が永遠に続くことについて話してくれました。わたしも永遠の家族を持ちたいと思いました。もしこの宗教を通してそれを実現できるのであれば、わたしも喜んで聞いてみたいと思いました。」

看護学校の学生だったリングは病気などで苦しんでいる人がその^{はんりょ}伴侶や家族からどのような対応をされているかを見てきました。「入院中だれもお見舞いに来ない患者さんもいます」とリングは話しています。「彼らには心配してくれる人がいないのです。わたしの職場の同僚の中には離婚して、家族の大切さをまったく考えていない人たちがいます。遊ぶことやこの世の富の追求だけしか考えていないような人もいます。わたしは人生にはもっと大切なものがあるはずだと考えていました。」

数か月後に、リングはバプテスマを受けました。彼女とキャッスルは今、教義と聖約第88章119節を指針として、二人が求めていた「永遠の家族」を築き始めました。キャッスルはこう話しています。「わたしたちは祈りの家、



断食の家、信仰の家、学びの家、栄光の家、秩序の家、神の家を築きたいと思っています。伴侶が同じ教会の会員であれば、夫婦は宗教に関して同じ価値観を持ち、同じ目標に向かうことができます。わたしの好きな格言にこのようなものがあります。『もし愛する人と幸せを分かち合うならば、幸せは2倍になります。悲しみを分かち合うときに、悲しみは半分になります。』これがわたしたちの目標とするところです。つまり、幸せを分かち合い、そして悲しみも分かち合うのです。」

「教会のおかげです」

リー・ヒン・ジュンとクムビエンクムポンスプ夫人は悲しみを分かち合うことにより生きる力を得ました。6年前、彼は職場の事故で片腕をなくしました。入院生活が続いたうえ、仕事を失った彼はすっかり落胆していました。リー兄弟がそうした困難な時期を乗り越えられたのは妻と子供たちと教会員のおかげでした。

現在と将来の計画について語る最近のリー兄弟の目は輝いています。香港神殿で妻と子供たちとの結び固めを受けることも彼の計画の一つです。リー兄弟はこう語っています。「教会に入る前のわたしは金もうけのことしか頭にありませんでした。現在のわたしにはお金よりも大切なものがあります。香港には金持ちがたくさんいますが、彼らには愛がありません。でもわたしたちは愛を見つけました。」

リー兄弟はさらにこう話しています。「多くの教会員は家族の中で自分

だけが教会員です。わたしは日曜日に家族と教会に行く度に、わたしたちは一つであること、永遠に一緒にいられることに感謝しています。」

リー兄弟は壁に飾られた香港神殿の絵を指差しながら、こう続けました。「聖文を読んでいたある日、ふと見上げるとこの絵が目に入りました。そして、力強くまた平安な気持ちを聖霊を通して与えられました。わたしたちは毎晩、家族が一つになれるように祈っています。神殿の絵を見る度に、わたしは善い人間にならなければならないこと、自分を治めなければならないこと、ふさわしくならなければならないことを再確認しています。」

リー兄弟は、まだ仕事を見つけれずにいますが、自分の置かれた境遇を心配している様子はありません。「確かに人生にはチャレンジが伴いますが、わたしにはイエス・キリストを信じる信仰があります。ですから、きっと何とかできます。」

リー家族は神殿に入る準備をするほかに、伝道活動を熱心に行っています。リー家族の働きかけによってすでに近所の家族が教会に入り、もう一つの家族も宣教師から福音を学んでいます。「その家族の両親は、うちの子供たちを見て、特別な印象を受けたそうです。なぜよその家の子供たちと違うのか、と尋ねてきました」とリー姉妹が説明しています。「そのご夫婦によれば、うちの子供たちは従順で、お互いを敬い、よく助け合っている、とのことでした。わたしたちは『教会のおかげです』とお話ししました。」

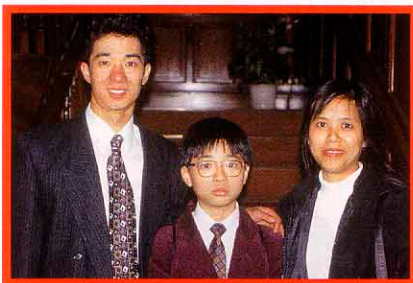
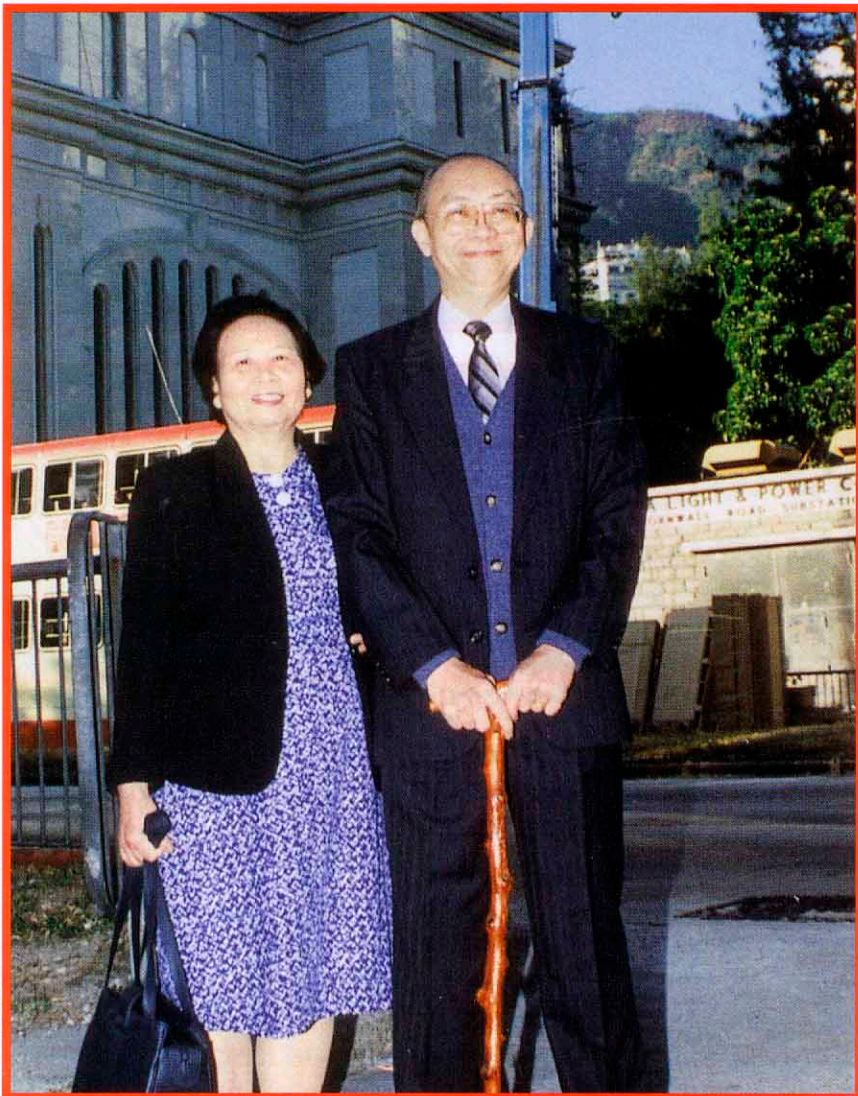
「大切な建物」

香港における教会は、最初の宣教師が1853年に到着して以来多くの変化を遂げてきました。最初の長老たちが香港に滞在したのはわずか4か月でした。実質的に伝道部が開設されたのは、それから1世紀近くを経た1949年のことです。1950年には香港で福音を宣べ伝える長老たちは8人になりましたが、朝鮮戦争の勃発によって全員がほかの伝道部に移動せざるを得なくなりました。

宣教師が戻って来たのは1955年になってからでした。この年に伝道が再開され、1960年には外国人の専任宣教師が91人、地元出身の専任宣教師が12人となり、会員数も8支部に約1,700人を数えるようになりました。

「わたしたちにとって神殿は夢でした。その夢がかなえられました」と七十人第二定員会の戴國源長老は語っています。香港で生まれ育った戴長老は祖国でアジア地域会長会会長として働いています。「神殿が完成し、儀式が執行されるようになった今、変化が起きています。より多くの教会員が神殿に参入して祝福を受け、犠牲の大切さを学んでいます。それにつれて、彼らは霊的にいっそう強められていくでしょう。」

「すべての神殿は神聖ですし、また大切ですが、この神殿はとても大切な神殿です」と神殿建築部長のアラン・ルドルフ兄弟は話しています。ルドルフ兄弟は南アフリカ・ヨハネスブルク神殿の建設とカナダ・アルバータ神殿の改装を手がけた人です。「工事がこ



左上——香港^{ホンコン}神殿のング・ガト・ヒン神殿長とング・パン・ライ・ハー夫人。
 右上——扶助協会の活動に参加する姉妹。左下——ラム・チ・リンとその婚約者
 チュイ・チ・ピンと談笑するマ・ソー・ゴン、マ・フォン・ソウ・ワイ夫妻。
 右下——香港島ステーキ、サウー・ゲイ・ワンワードの会員たち、レン・イウ・トン、
 レン・ゴン・シオ・チュウ夫妻と息子のホク・マン。



れほど早く進んだのは奇跡です。3年ばかり前にわたしたちはまだ1階部分を工事していました。この神殿の工事には主の手が添えられていたことをわたしは知っています。」

香港神殿のユニークな設計には、建物の密集した香港での限られた敷地面積を考慮したことがよく表れています。この敷地に以前建てられていた建物は、ステーキセンター、伝道本部、伝道部長の住居として使用されていました。新しく建設された建物は地上6階建てですが、4階から6階部分だけが神殿として使用されます。

建物の入り口は二つあり、ともに1階にあります。片方の入り口には推薦状を確認するデスクがあります。参入者は有効な推薦状を入り口で示してから、エレベーターで神殿のある階まで行きます。もう一つの入り口はほかの施設に通じています。伝道本部、伝道部長用住居、伝道本部スタッフ用住居、神殿長用住居、ガーメントセンター、礼拝堂、教室、二つのワードの事務室です。

香港神殿は大きな伝道の手段となることでしょう。会員たちは家族や友人、近所の人々、職場の同僚から、教会の名前のついたかこう岩作りの堂々とした建物について質問を受けています。

実際に、神殿の建設工事が始まってから様々なことが起こりました。「当初、建築現場で働く人々は何のための建物かを知りませんでした」と建築副部長のカール・シャンペイン兄弟は述べています。「彼らにとっては一つの現場にすぎませ



PHOTOGRAPH BY TELEGRAPH COLOUR LIBRARY/FPG INTERNATIONAL CORPORATION



上——香港神殿奉献式で発表するためにリハーサルを行う聖歌隊。

左上——香港港に浮かぶ中国の帆船。下——奉献されたばかりの香港神殿で結婚したキャッスル・チェンとリンダ・チョイ。

んでした。けれども、工事が進められていくにつれて、わたしたちはそこで働く人々の態度が変わってきたことに気づきました。彼らは、自分たちが建設に携わったことを誇りにできる建物であると知ったのです。」

香港伝道部のジョン・アキ部長によれば、何人かの作業員が教会について勉強を始めている、とのこと。香港九龍東ステーキの若い男性と若い女性

が建築現場で働く人々のために催した昼食会が一つのきっかけとなりました。アキ部長はこう伝えてくれました。「彼ら



はその場の温かい雰囲気^{ホンコン}に感銘を受けたようです。そして、神殿が大切な建物であることを悟ったのです。」

「ほかの神殿とは違う 神殿になることでしょう」

香港の会員たちはゴードン・B・ヒンクレー大管長に対して特別な親近感を抱いています。ヒンクレー大管長自身が副管長時代に香港神殿の敷地を決定したこと、そのとき香港神殿だけに見られる建物の細部について非常に具体的に述べたことを会員たちはよく知っています。ヒンクレー大管長は香港神殿の奉献について次のように述べています。

「わたしにとってこれは奇跡です。地球の人口の4分の1が住む中国に主の宮を持つことは……すばらしいことです。」

わたしはアジアにおける御業^{みわざ}の責任を中央幹部の兄弟たちから与えられた1960年以来、香港を訪れています。偉大な中国の国土に神殿を建てることを考える度に目頭が熱くなります。この神殿はほかの神殿とは違う神殿になることでしょう。神殿の建設用地を探すために香港を訪れた際、わたしは特別な主の靈感を受けました。どうすべきかを非常にはっきりと示されたのです。」

「その後^{ホンコン}にわたしたちの努力は 必ず報われるでしょう」

香港の人口の約95パーセントは都市部に住んでいます。彼らの住む高層の

細長いアパートが文字どおり天を突くように建ち並んでいます。狭い道路は仕事に出かける人々、あるいは夕方、待ち合わせの場所に急ぐ人々であふれかえり、肩を触れ合うように歩いています。様々な文化的背景を持った多忙な人々が渦巻くこの町で、香港神殿は人々に安堵感^{あんど}を与えるかのように堂々としたたたずまいを見せています。

香港は1997年7月に中国に返還されますが、それまで1年以上の期間にわたって、儀式が執行されることになりました。

「わたしたちは指導者として、神殿が現在だけでなく将来にわたってどれほど大切な意味を持つかを会員たちに理解させるように努力しています」と戴長老^{ダイ}は語っています。

会員たちはそれを理解しているようです。この人口過密な地域では平均的な広さである35平方メートルのアパートの一室に、ジル・ラム姉妹は3人の姉妹、両親それに母親の両親と一緒に暮らしています。壁には15枚以上もの神殿の絵はがきがはられています。ジルの母親と祖母は神殿の儀式のために家族歴史の書類を熱心に作成しています。記録を集めるために彼らはこれまで、故郷の中国、インドネシア、台湾まで何度か旅行しています。

「家族の歴史活動を行うためには生まれ故郷に戻らなければならないことがあります」と地区の家族歴史スーパーバイザーを務めるピーター・リー兄弟は言います。「この会の多くの会員は政府が大きく変動したときに故国から逃れてきて教会員になった第1世代ま

たは第2世代の人たちです。彼らは過去の時代や先祖を思い出しては悲しみを感じています。亡命者であった彼らは何も持たずにやって来ました。また残っていた多くの記録は度重なる占領と革命で失われてしまいました。」

「このため、わたしたちは香港で入手できる資料と今後どのような情報を探したらよいかということについて教えています」と、リー兄弟は香港に5つあるすべてのステークにおいて開かれた家族歴史ファイヤサイドでの様子を説明しています。ファイヤサイド以外にも各ユニットでは家族歴史活動の大切さをテーマとした特別聖餐会^{せいさん}が開かれています。

「会員たちには現在までに自分で集めたすべての情報を書き出すように奨励しています。そして、香港にある3か所の家族歴史センターへ行き、親戚の人たちと家族歴史について話すように勧めています。最終的に何も見つけられなかったとしても、自分たちと自分たちの家族から始めることはできます。わたしたちには忍耐と祈りと時間が必要です。」そして、リー兄弟はこのような言って話を終えました。「その後^{ホンコン}にわたしたちの努力は必ず報われるでしょう。」

「一代ずつ着実に」

このように家族歴史の活動が盛んに行われるようになったため、家族歴史宣教師がたくさん召されるようになりました。ロー・チ・シン兄弟と奥さんのロー・トン・グウォック・ウォン姉妹は4年前に家族歴史宣教師に召され

ました。現在、ロー夫妻は香港^{ホンコン}で最初の地域家族歴史宣教師として働いています。二人の任務はステーク宣教師を訓練すること、家族歴史のクラスを教えること、会員たちが家族歴史の用紙を記入できるように援助することです。

「けれどもわたしたちの第一の責任は励ましを与えることであると考えています。会員たちが喜んでこの作業に携わるようになることを目指しています」とロー兄弟は述べています。「もちろん、思いどおりに行かないこともあるでしょう。けれども復活によってもたらされた祝福はわたしたちだけのものではなく、先祖に与えられたものでもあることを理解しなければなりません。わたしたちは先祖のために働かなければならないのです。」

「大切なことはまず出発点に立つことであり、宣教師たちはすべての会員が家族歴史の用紙を記入できるようにすることを目標としています」と、ロー姉妹は話しています。「もし必要であれば、会員一人一人と記入した用紙をチェックするつもりでいます。一代ずつ着実に進めます。」

神殿がこれほど身近なものとなった現在、家族歴史の活動はこれまで以上に活発に行われなければなりません。けれども香港のすべての会員たちにとって家族歴史活動に従事するのはこれが初めてではありません。これまで長年にわたって会員たちは台湾^{タイペイ}の台北神殿に人名を送ってきたからです。でも、これからは香港神殿に人名を提出すればよいわけです。「香港神殿で儀式を執行するために今後数か月間で、少なくとも5万人の人名が新たに会員たち

から提出されると思います」と香港神殿記録部長のステイブン・リー兄弟は話しています。

「パトリックが きちんとしてくれますよ」

パトリック・ウォン兄弟は自分の家系からすでに30代以上に及ぶ人名を提出しています。現在、地域幹部として働くウォン長老は神殿活動の大切さについてしばしば証^{あかし}をする機会を得ています。

「わたしは16歳のときにバプテスマを受けました」とウォン長老は話し始めました。「家族の中でわたしが最初でした。幸いにも、多くの第1世代の改宗者とは違って、家族のほとんどが教会に入りました。両親と、弟と妹が一人ずつです。両親は改宗しましたが、とうとう結び固めを受けられませんでした。母が健康を害していたからです。」

1988年、わたしたち夫婦がオーストラリアに住んでいたときに、父が亡くなりました。その1年後に母が亡くなりました。母の葬儀のために香港へ戻ったときに、両親のための儀式を行うべきだということに話がまとまりました。そして、弟が台湾の台北神殿で行うことを申し出ました。

2か月後に妻は夢を見ました。妻は夢の中でわたしの母に出会ったのですが、母はとても悲しそうな様子でした。『おばあちゃん、どうして悲しそうな顔をしているのですか』と妻は尋ねました。『パトリックの弟はわたしの面倒を見てくれると約束してくれたのに、まだ果たしてくれないのですよ。』

『おばあちゃん心配しないで。パトリックがきちんとしてくれますよ』と妻は約束しました。

皆さんはこのように言うわたしを信じてくださるかどうか分かりませんが、わたしは妻からその夢の話聞いたときに、その意味をよく理解できませんでした」とウォン長老は語っています。「けれども2週間後に妻はまた夢を見ました。今度はわたしの父の夢でした。『キャシー、パトリックに言っておくれ。わたしたちはできるだけ早く結婚しなければならないのだ。』キャシーからそのことを聞いたとき、わたしはようやく意味が分かりました。」

わたしはすぐに弟に電話をかけて、両親の儀式を執行するために神殿へ行ったかどうかを尋ねました。弟はまだ行っていないでした。弟の奥さんが病気になって、なかなか回復しないために行けないでいる、とのことでした。そして、『お兄さんが神殿へ行って、儀式をしてくれませんか』と頼まれました。このため、わたしたち夫婦は数日後にシドニーの神殿へ行きました。こうして両親は結び固めを受けたのです。

この儀式は先祖にとってどうしても必要なものです。」ウォン長老は込み上げてくる感情を抑え切れない様子でこのように話を終えています。「わたしの両親は自分たちの儀式を心から望んでいました。ほかの先祖も同じ思いをしています。香港神殿は天父のご計画に従って建設されました。香港神殿はわたしたちにとって慰めであり、この地と全世界の中国人に対する主の信頼の象徴であり、教会の将来を告げるものです。」□

「結び固めは偉大な祝福です」

リー・ウィン・フォンが妻のリー・カン・シューイ・ダオとともに教会に入ったのは1956年のことでした。リー兄弟は当時を思い起こして「わたしはバプテスマを受けたときにまったく新しい人になったように感じました」と語っています。けれども、当時集会が開かれていた場所は彼の家からはるか遠く離れた所にあり、またリー兄弟は経済的に苦しい状態に置かれていました。リー兄弟が手に入れた英語の『モルモン書』は2日分の賃金をすべてはたいて買ったものでした。集会に集うための交通費は大きな負担でした。このようなわけでリー家族は次第に教会から足が遠のいていきました。

「でも、英語の『モルモン書』を手放したりはしませんでした」当時、イギリス軍の軍属運転手として働いていたリー兄弟は話しています。「それはとても大切な宝物だったからです。」

以来、宣教師たちは時々リー家族を訪問していました。そして3年前に訪問した二人の姉妹宣教師がリー兄弟にチャレンジを与えました。「姉妹たちはわたしに『モルモン書』を読むように言いました。姉妹宣教師は週に1度我が家を訪れて一緒に『モルモン書』を読んでくれました。」

それでも教会に行くことは困難でした。8年前にリー姉妹は脳溢血で倒れて、歩けなくなりました。リー兄弟は現在は退職しており、リー姉妹の面倒



PHOTOGRAPH COURTESY OF LEE FAMILY

リー・ウィン・フォンとリー・カン・シューイ・ダオ夫人。宣教師たちとともに。

を見るためにほとんどの時間を費やしています。「妻を一人残して外出することはできませんでした」とリー兄弟は説明しています。

宣教師たちはリー兄弟姉妹に聖文を読んでもらうために訪問を続けました。そして1995年9月に、リー兄弟にとって思ってもみなかったうれしい出来事が起こりました。40年前にリー兄弟にバプテスマを施した宣教師、ジェリー・ホイット兄弟が長老たちとともにリー兄弟の家を訪れたのです。「わたしは今、香港で広報宣教師として働いています。ずっとリー兄弟はどうしているかと心配していました。宣教師たちがあなたを訪問していると聞いて、喜んで一緒についてきたのです」とホイット長老は説明しました。

二人は昔からの友達のように抱き合おうと、40年間それぞれの人生に起こった出来事を話し合いました。ホイット長老はその後、再びリー家族を訪問しました。今回は神殿について話すためでした。「奥さんと結び固めを受ける

準備をするようにチャレンジしました」とホイット長老は説明しています。「そして彼はそのチャレンジを受け入れました。」

それからのリー兄弟は近所の人やワードの会員たちに奥さんの世話を頼んで教会の集会に出席するようになりました。リー兄弟姉妹はワードの会員たちの助けを借りて、神殿の頂きに天使モロナイ像を据え付ける式典に参列しました。そして、香港神殿がオープンして数日後に二人は結び固めを受けたのでした。

リー兄弟はこう語っています。「結び固めは偉大な祝福です。だれもが享受している祝福ではありません。わたしは宣教師に感謝しています。最初に、福音を教えてくださいました長老たち、大きな思いやりと愛をもってわたしと一緒に聖文を読んでくださった姉妹たち、そして現在も我が家を訪問してくださる宣教師たちに対してです。福音は真実です。『モルモン書』はその証です。」□

勇



氣を奮い，信仰を語る

ニーナ・バサルスカイア（バレリー・パーカーに語った話に基づく。）

ILLUSTRATED BY ROBERT A. MCKAY

数年前、わたしはモスクワに近いズビョーズドヌイゴロドクで開かれた英語教師国際大会に出席しました。わたしは英語を母国語とする教授と英語で話すことに戸惑いを感じていました。英語教師になって何年もたっていましたが、国際大会に出席するのはそれが初めてで、自分の英会話力で大丈夫だろうか、と心配していたのです。

大会が終りに近づいて、わたしはロシアの現状についてのグループ討論会に出席しました。できるかぎり英語を話さなくてもよいよう、満席状態の部屋の隅に隠れるように座りました。

討論会の中で、アメリカから来た白髪の教授が立ち上がり、次のような質問をしました。「ロシアではどんな宗教的変化が起きているか教えてください。」

その質問の後、会場は静まり返ってしまいました。だれも質問に答えようとはしませんでした。宗教に関する自分の思いをほかの人と分かち合うのは、ロシアではまだ尋常なことではなかったのです。ただ、その沈黙はわたしにとって耐え難いものでした。わたしには自分なりの考えがあったからです。思い切って口を開くように促す気持ちを感じました。

内心恐くてたまりませんでした。わたしは立ち上がり、自分が宗教を重んじる家庭に育ったことについて、英語で話し始めました。わたしの父の先祖の中には司祭の職にあった人たちがいました。そのうちの何人かはスターリン収容所で殉教したのです。

そのような中であって、だれにも気づかれずに済むモスクワへ出張するとき以外、教会に出席する

ことはありませんでしたが、物心ついたころからずっと、神を信じ祈ることはわたしの生活の中で欠かせないものとなっていました。しかし、1991年以来、クリスチャンとしての信仰を隠す必要はなくなりました。わたしは自分の先祖が神を信じるがゆえに命を捨てた事実を決して忘れるはしませんでした。ロシアに宗教の自由が回復されたことをほんとうにすばらしいと感じていました。

話し終わった後で、世界のあちこちから来ていた教師たちも、わたしの回答について肯定的な気持ちを分かち合ってくれました。質問を投げかけた教授は、ブリガム・ヤング大学の教授でした。このとき以来、わたしたちは温かい友情をはぐくむことができました。彼から、末日聖徒や『モルモン書』、回復された福音について教わりました。

やがて、英語を教える目的で同じブリガム・ヤング大学の学生がわたしの町ボロネジにやって来ました。わたしは彼らを我が家に招いてロシア料理を教え、彼らは日曜日の集會にわたしを招待してくれました。その集會に感じられる簡素な雰囲気、光、會員間の愛の精神に深い感銘を覚えたわたしは、毎週欠かさず出席するようになりました。

わたしは聖文を読み祈ることにより、悔い改めやバプテスマ、聖霊^{たまもの}の賜物について学んでいきました。そして1992年12月15日、モスクワでブリガム・ヤング大学の学生からバプテスマを受けました。1993年の1月にはボロネジに宣教師が派遣され伝道活動が開始されました。2月には、わたしの息子がバプテスマを受け、その1年後には彼がわたしの夫にバプテスマを施しました。こうして、白髪の教授が証^{あかし}の種をまいてくれたおかげで、わたしの家族の生活は生きがいと喜び、そしてロシアの人々に福音を広めようという精神に満ちあふれるようになりました。□

人の声ではなく

十二使徒定員会会員
M・ラッセル・バラード

ジョセフ・スミスが現代の聖文に記録されている偉大な啓示を受ける様子を目の当たりにすることができたらはたしてどのような気持ちになるか、皆さんは想像できるでしょうか。ジョセフ・スミスは10人以上の人がいる前で啓示を受けたことが何度もあります。その人々の多くは、ジョセフ・スミスが啓示を受けたときの目に見えるしるしと御霊について証をしています。ジョセフを取り巻いた白い輝きについての彼らの話は、その典型的な例と言えます。

例えば、教義と聖約第76章が与えられたときのことについて、フィロ・ディブルはジョセフが「輝くばかりの白さをまとい、その顔は透き通るように輝いていた」と記されています。¹ オーソン・プラットは第51章が授けられた場に居合わせ、「ジョセフの顔は非常な白さで、輝いているように見えた」と証しています。² プリガム・ヤングもこう証しています。「彼をよく知る人たちは、啓示の霊が彼に臨むと、すぐにそのことを理解できた。なぜなら、彼の容ぼうがそういうときに特有のものになるからである。ジョセフ・スミスは啓示の霊によって人々に教えを説き、評議会で教えた。そしてジョセフ・スミスを親しく知る人々は彼が御霊を受けた状態になったことをすぐに知ることができた。そのようなとき、彼の容ぼうには特有のまばゆさと透き通るような輝きがあったからだ。」³

多くの人々は、これらの啓示が流れるごとくに主から与えられ、つづりや句読点などの小さな訂正以外に、修正の必要がなかったことに強い印象を受けました。

パーリー・P・プラットは次のように書いています。

「それぞれの文章はゆっくり、そして非常にはっきりと、文と文の間に並みの筆記者が普通の筆記法で記録できるに十分な間を置いて語られた……。主題の流れからそれないようにするために口ごもったり、見直したり、読み直したりすることは一度もなかった。またこれらのどの啓示にも修正や捜入、訂正がなされたことはなかった。わたしの知るかぎりでは、預言者は彼らがついてこれるように、そのようにして口述していた。わたしは一つ一つが数ページほどの長さの啓示を口述する場に何度か居合わせ、その様子を自分の目で見た。」⁴

ジョセフをよく知る人ほど、啓示が授けられるときの状況に大きな驚きを感じました。ジョセフの生来の能力と学校で受けた教育をもってしては、それらの神からの啓示を口述することなど、とても不可能なことだったのです。

このことについて、ジョセフと働きを共にしたある教育者は驚きをもって証しています。「〔ジョセフと筆記者が〕席に着くと、前もって熟慮するということなく……、断続的に文書が口述されていく。それはわたしがそれまでに読んだあらゆる本の中でも、特に優れた文章に数えられるものであった。」⁵

ジョセフ・スミスが『モルモン書』の翻訳に携わっていたのは、カートランド時代の啓示の大半が授けられるほぼ3年前でした。ジョセフをいちばんよく知っていた妻のエマ・スミスは、その間、夫が「一方で『モルモン書』『もちろん『教義と聖約』や『高価な真珠』もです





が]のような本の口述をしているのに、手紙の中では理路整然とした文章も洗練された言葉も書けない」という事実に驚いています。彼女はこう証^{あかし}しています。「ほかのだれもそうだと思いますが、わたしにとってそれは驚きでした。驚くべき不思議なことでした。」⁶

啓示が与えられるプロセスについて、驚きが続いたという点において、エマの証はパーリー・P・プラットの次の証に似ています。「彼が靈感を受けていなかったとしたら、だれも聖典の記録の口述はできなかっただろう。わたしはそのことをうれしく思っている。[わたしが]彼の筆記者をしていたとき、[ジョセフは]何時間も続けてわたしに向かって口述した。食事が済んでまたその仕事に戻るときも、何かの用事で中断された後でも、彼は原稿を見たり、前の部分をどこか読ませたり、ということもなく、前に終わっていた所からすぐに口述に取り

かかることができた。それは彼にとって普通の行動だった。たとえ学識のある人であろうと、そのようなことができるとはとても思えない。まして彼のように学問もなく無知な人間には、とても不可能なことだ。』

『教義と聖約』の中に収められている啓示は、『モルモン書』が翻訳されたときと同様に、神の力を通して授けられたものです。

皆さんは、『モルモン書』『教義と聖約』『高価な真珠』がどれほどすばらしい奇跡であるかを理解できるでしょうか。これらの書物は人の手に成るものではありません。文字どおり、わたしたちに与えられた神の言葉なのです。主御自身も次のようにおっしゃっています。「これらの言葉は人々から、人間から出ているのではなく、わたしから出ているのである。……これらの言葉をあなたがたに語っているのは、わたしの声である。」(教義と聖約18:34-35) □

注

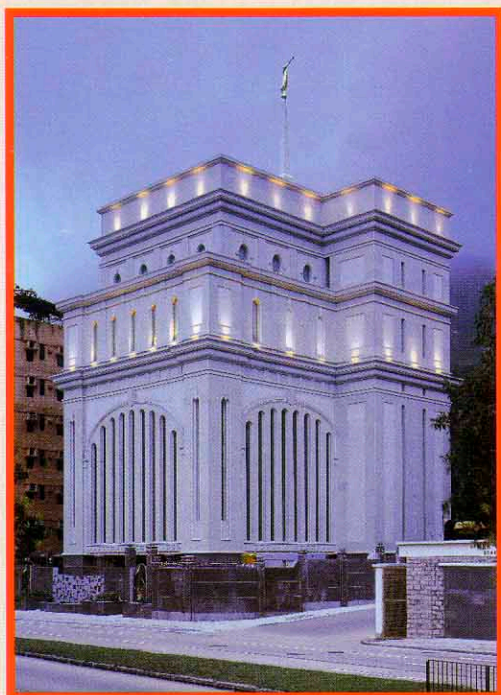
1. B・F・ジョンソン "Early Scenes in Church History" *Four Faith Promoting Classics* 「教会歴史初期の時代」『信仰を鼓舞する4冊の名著』p.81
2. *Millennial Star* 『ミレニアルスター』1874年8月11日, p.498
3. *Journal of Discourses* 『説教集』9:89
4. パーリー・P・プラット, *Autobiography of Parley Parker Pratt* 「パーリー・パーカー・プラット自叙伝」p.48
5. *The Ensign of Liberty, of the Church of Christ* 『キリストの教会の自由の旗』1848年8月, pp.98-99
6. "Excerpts from Testimony of Sister Emma" *Saints Herald* 「エマ姉妹の証の抜粋」『セイント・ヘラルド』1879年10月1日付け, p.290
7. 同上

1994年11月6日、教会教育部のファイヤサイドにおける講話



「リバティーの監獄でのジョセフ・スミス」 グレッグ・K・オルセン画

預言者ジョセフ・スミスは、1838年から1839年にかけての冬の間、ミズーリ州リバティーの監獄に不当に投獄されていた。
この期間にジョセフは、現在教義と聖約第121、122、123章に記されている深遠な啓示を受けた。



左端——香港神殿。ほかの写真（上から）——香港，トロハーバーステーク，ダイボーワードのエドワード・ホー監督。香港初の家族歴史宣教師ロー・チ・シン，ロー・トン・グウォック・ウォン夫妻（写真撮影／ケリー・リックス・アダムス）。香港九龍西ステーク，シャンリーワードのリー・チャン・ユクフンと子供たち，ツェ・ワン，サイ・ハン，および香港九龍西ステーク，クワイジュン第1ワードのセミナリ一生徒ジャン・ギン・グウォック。

ホ ン コン
香 港における教会は、宣教師たちが1853年に最初に到着して以来、大きな変化を遂げた。そして、1996年に行われた香港神殿の奉献に伴い、ひととき大きな変化の一つが起きている（本誌「夢がかなった、香港の聖徒たち」p.34参照）。



ワースリン長老、 かつての「閉ざされた町」 を訪問

——ロシア、ウラジオストック発——

ウラジオストックの港の近くで（左から）エリサ・ワースリン姉妹、ジョセフ・B・ワースリン長老、ディーン・ニールセン兄弟（副支部長）、バーラ・ソレンセン姉妹、デビット・E・ソレンセン長老



19 96年11月18日、十二使徒定員会のジョセフ・B・ワースリン長老が、ロシアのウラジオストックを訪れ、ロシアにおける末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史に新たな1ページが書き加えられた。ワースリン長老は忠実な末日聖徒と教会に好意的な人々の歓迎を受けた。

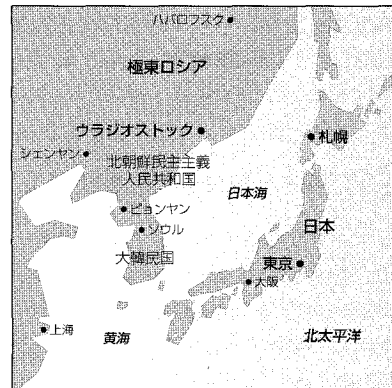
以前は東シベリアと呼ばれ、現在は極東ロシアと呼ばれているこの地域に十二使徒が訪問したのは今回が初めてである。ウラジオストックにはロシア海軍の太平洋司令部が置かれている。ウラジオストックは冷戦中は「閉ざされた町」だったが、1992年には外の世界に対して開かれるようになった。

ワースリン長老とエリサ夫人の今回のウラジオストック訪問には、アジア北地域会長デビット・E・ソレンセン長老とバーラ夫人が同行した。

今回のこのウラジオストック訪問は、日本と韓国で開かれたワースリン長老による宣教師訓練集会の旅程に加えて実現したもの。ウラジオストックは教会のアジア北地域に属し、東京からは空路8時間の距離にある。

ウラジオストックで働く3組の夫婦宣教師が1995年に召されている。人道的救援活動を行うこれらの宣教師は、キム・キ・ヨン長老とキム・クム・ジャエ姉妹またクレア・モリス長老とスザンナ・モリス姉妹、そしてジャック・バーラ長老とノラ・バーラ姉妹で、おもに英語を教える活動に携わっている。

この夫婦宣教師が召されたのと時を同じくして、それまで多国籍企業の社員として国外に勤務していた幾つかの教会員の家族がウラジオストックに転居してきた。その中には、マイケル・ウィリアムズ、ジョイス・ウィリアム



ズ夫妻、ケビン・マシューズ、デルロイ・マシューズ夫妻、ディーン・ニールセン、シュリー・ニールセン夫妻などがある。

極東ロシアで最初の地方部は、1996年3月8日に組織された。現在、ウィリアムズ兄弟がウラジオストック地方部の地方部長、マシューズ兄弟がウラジオストック支部の支部長の任にある。ウラジオストックで活動している専任宣教師たちはアジア北地域会長会の管理下にある。

11月19日の午後、ワースリン長老とソレンセン長老は、極東州立大学のウラジミール・イワノビッチ・クリロフ学長と会談した。

その後、夕方になって、ワースリン長老とソレンセン長老は、神権指導者、宣教師、会員また教会に好意的な人々との集会を開いた。11月19日のファイ

ヤサイドでは、ワースリン長老とソレンセン長老が公会堂で76人の聴衆を前に話をした。そのうちの27人は教会外の人々であった。

ワースリン長老は小人数の出席者を前にこう語った。「今回の旅で最もすばらしかったのは、この美しい町で皆さんのようなすばらしい人々にお会いできたことです。皆さんの前途にはすばらしいものがあります。鉱物資源、林業、漁業、海運業など、実にすばらしいものがあります。しかし、この地の最もすばらしい資源は、人的資源です。」

ワースリン長老は信仰箇条の第12節を引用し、教会員はそれぞれの国の法律に従うよう勧告されていることを説明した。さらに、熱心に耳を傾ける出席者に、高校時代に愛読したのがレフ・トルストイの作品であることを話し、1892年にトルストイが語った次の

言葉を引用した。「もしモルモニズムが堪え、変わることがなく、3世代そして4世代に至るなら、世界がかつて知ることのなかった大きな力となることだろう。」(Improvement Era『インプルーブメント・エラ』1939年2月号、p.94)

ワースリン長老は、末日聖徒イエス・キリスト教会が世界各地で、数多くの人道的救援活動を展開していることに言及し、それがキリストの教えの真の精神の表れであることを話した。救いの計画についての教えを述べた後で、ワースリン長老は最後に次の言葉で話を終えた。「この教会は真実の教会です。そこには、皆さんやわたしが天の御父のみもとに戻るための計画が備えられています。」(Church News『チャーチニューズ』1996年12月7日付け)



割り当てられている地域が2街区だけという小さな伝道部でありながら、宣教師の人数では教会全体でも最大規模の伝道部と言えば、どこの伝道部かわかりますか。おもに求道者を見つけることに専念し、バプテスマを見ることのない伝道部は、どの伝道部でしょうか。恐らく最も国際的な伝道部は、どの伝道部だと思いますか。

答えはソルトレーク・templスクウェア伝道部です。

最も国際的な伝道部

templスクウェアには世界中から観光客が集まります。毎年templスクウェアを訪れる500万人もの人々を案内し、教会について教えるためには、約200人の宣教師を要します。この伝

道部に含まれる場所は、タバナクル、アッセンブリーホール、2か所の訪問者センター、幾つかの開拓者記念碑、そしてtemplスクウェアとは道路を挟んで反対側にあるジョセフ・スミス記念館です。ジョセフ・スミス記念館では、ファミリーサーチというコンピュータープログラムを活用して自分の親戚や先祖の記録を探しに来る訪問者を助けたり、開拓者の勇気を描いた映画『レガシー』(『われらの遺産』)を見に来る人々を案内したりします。

この伝道部は、教会の中では珍しい存在となっています。敷地内の案内や映画上映を通して、templスクウェアで働く宣教師は訪問者にイエス・キリストの神性や教会の歴史について紹介します。しかし、標準的な宣教師のレッスンをしたり、バプテスマを施したりすることはありません。その代わり、教会についてもっと知りたいと興味を示した人の名前を、彼らの住む地

域の伝道部へ送るのです。

さらに1989年から、姉妹宣教師と夫婦宣教師のみがこの伝道部に召されるようになりました。また姉妹宣教師は、伝道期間の一部を合衆国内のほかの伝道部で働くことになりました。18か月の伝道期間のうちの4か月間、templスクウェアからほかの伝道部へ転任し、そしてその後またtemplスクウェアに戻るのです。これにより、レッスンを教える経験が得られるわけです。

また、ほかの伝道部と違って、この伝道部では多数の言語を使用する必要があります。templスクウェアには、世界各国から訪問者が来るので、全体的にはどこの伝道部よりも多くの言語が日常的に飛び交っています。そのため、恐らく最も国際的な伝道部と言えるのではないのでしょうか。

日本から召された宇根縁姉妹

宣教師の多くは、合衆国以外の国々

から召されています。ほかの宣教師が召されるときと同様、神権指導者との面接でふさわしさを確認された後、大管長会から召しを受けます。大阪堺ステーキ和歌山ワード出身の宇根縁姉妹は、テンプルスクウェアで伝道している日本人姉妹の一人です。

宇根姉妹の両親は、教会員ではありません。何度も話し合った末、両親は宇根姉妹が伝道に出ることを承諾してくれました。娘が日本で働くよう召されると思っていたことでした。ですから、宇根姉妹がテンプルスクウェアでの召しの通知を受け取ったとき、両親は喜んでくれませんでした。しかし、宇根姉妹はこう言っています。「両親は、教会がわたしにとっていかに大切なものであるか理解してくれています。そして、ここがわたしにとってすばらしい任地であると受け入れてくれるようになりました。」

宇根姉妹は5年前、弟とともに教会に入りました。親しい友人が伝道に出る決心をして以来、自分も伝道に出ることを考え始めました。友達の模範に深く感銘を受け、自分も伝道に出ることについて祈り始めたのです。

合衆国で召された郡司知枝姉妹

日本語を話す宣教師をもう一人紹介しましょう。ロサンゼルスステーキ、

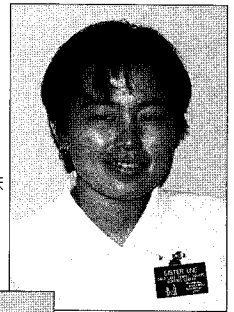
ロサンゼルス第1ワード出身の郡司知枝姉妹です。郡司姉妹は3年半前に合衆国に来ました。それ以前は母国日本の東京北伝道部に住んでいました。そこでバプテスマを受けたのです。

郡司姉妹は、家族で一人だけの改宗者です。バプテスマを受けたときから伝道に出たいと思っていました。伝道に出れば日本に戻ることにになり、自分の家族に教える機会があると思っていました。召しを受けてみると、あいにく日本には帰れないことが分かりました。でも、日本人に教えることができると思うと、胸が躍りました。

郡司姉妹は、スクウェア内で案内を^{みたま}して御霊を感じるのが難しかったときのことを覚えています。案内が終わって気持ちが動揺するのを感じました。そして、今回はもっと御霊を感じられるように、と祈りました。次の案内が始まる前、ある女性がお礼を言いに来ました。その女性は郡司姉妹の前の回の案内を聞いていた人で、御霊を感じられたことに対し、お礼を言いたかった、とのことでした。郡司姉妹はへりくだって主に祈り、自分を通してその女性を教えてくださいましたことに感謝しました。

「自分ではなかなか御霊を感じられ^{あかし}なかったのですが、わたしが証を述べ、イエス・キリストへの愛、そして預言

宇根姉妹



郡司姉妹



者ジョセフ・スミスの偉大な信仰について語ったとき、御霊がそこにあり、人々の心に触れたのです。」

テンプルスクウェアの宣教師には、主への愛とお互いへの愛が共通して見受けられます。主の御霊によってこの宣教師たちは固く結ばれています。多くの異なった文化背景を持つ国々から来ているということは、問題にはなりません。様々な国の人々を教えているということも関係ありません。このテンプルスクウェアでともに働くときに、宣教師の心は、確かに一つとなるのです。□

ロシアにおける伝道活動 ——福祉宣教師としての大きな喜び——

韓国ソウル・ヨンドNSTEAK
キム・キ・ヨン

戦争捕虜であったときに ささげた祈り

わたしは、宣教師として主のために立派に働きたいという希望をずっと胸に抱いていました。次第に年老いていく中で、どうしてもこの願いを実現させたいと決意を新たにしました。そして、ついにその機会が訪れました。それは、わたしがかつて日本関東軍の戦争捕虜として、大勢の仲間とともに3年間抑留されていたロシアで、専任宣教師として働く召しでした。

多くの日本人戦争捕虜が死んでいく中で、わたし自身もとても困難な極限の状態に置かれていました。わたしは主にこう嘆願しました。「主よ、どうかわたしを生き長らえさせてください。祖国に帰り、どのようなことであれ主の僕として働く機会をお与えください。」「わたしの子孫にあなたの僕として働く機会をお与えください。」わたしはこの度与えられた伝道の召し

が、かつて熱心にささげた祈りのこたえであったと考えています。ですから、この召しに運命的なものを感じるのです。

1995年5月6日、わたしはアジア北地域から召された最初の福祉宣教師としてウラジオストックに到着しました。ロシアで宣教師として働く意欲に燃え、またロシア人の気持ちを理解できるという自負心を抱いてロシアの土を踏んだのです。

ウラジオストックに一つの支部

ウラジオストックには、すでに一つの支部が組織されており、アメリカ企業で働く人々が数人と、アメリカ領事館職員数人が出席していました。出席者は全員が教会員でした。しかし、集

会所がなかったため、日曜日の集会は支部長会の兄弟たちの家を毎週転々として開いていました。支部長会の全員が仕事の関係でウラジオストックにいらなくなってしまい、安息日の集会を開けないことも時々ありました。

アメリカ領事館からの情報によると、当時ウラジオストックには25の宗教グループが組織され、地元の政府機関に登録されていました。市の管理当局はこれらの宗教グループが社会不安を招く可能性があると考え、かなり神経をとがらせていました。

韓国語と日本語を教える教師として

このように非常に緊張した雰囲気の中で、わたしは東洋語学学校（ベレストロイカ後に設置された私立の学校）で韓国語と日本語を教える傍ら、求道者を探すことを目的に極東大学でも日本語を教えることになりました。

4か月後の9月6日、アメリカ合衆国から3組の夫婦の福祉活動宣教師が到着して、彼らも数校に分かれて英語を教え始めました。学生たちは熱心に学業に取り組んでいました。さらに翌年の2月初旬に、モスクワとアメリカ合衆国からロシア語の堪能な6人の専任宣教師が着任しました。そこでわたしたちは教会の集会を開くための建物を借りることにしました。こうして本格的な伝道活動が始まったのです。

「これほど熱心に祈った記憶はありません」

1996年3月25日、東洋語学学校で英語

の教師をしている女性がバプテスマを受けました。彼女はわたしが見つけた求道者でした。ちょうどそのころ、妻のキム姉妹が指にけがをしました。

妻は治療を受けるために、しばらくソウルに帰らなければなりませんでした。そのときわたしは、人の力だけで主の業を成し遂げることはできない、と気づきました。主の助けが必要でした。それからわたしは熱心に祈り始めました。これまでの人生で、これほど熱心に祈った記憶はありません。わたしは主にこう祈りました。「もしわたしの祈りが世の誉れを得るための利己的な願いではなく、主の助けを受ける価値のある正しい願いであるならば、義人を見だし、彼らをシオンに導けるように祝福してください。」わたしの思いは次の賛美歌の歌詞に表されています。「イスラエルの長老たちよ 砂漠、山、海、陸へと 義人を探して、自由の シオンへ連れて来たれよ」（賛美歌）196番

教会に導かれた二人の男性

このような祈りをささげ始めて間もなく、わたしは偶然駅で隣に座った格好のいい男性と話をするようになりました。彼は普通のロシア人とは違って、たばこを吸わず、アルコールを口にすることはありませんでした。ロシア陸軍の大尉だったこの男性は、非常に理知的な人でもありました。わたしたちはすぐに良い友達になりました。やがてお互いの家庭を訪問するようになると、家族全員と仲良しになりました。そして彼はついに教会に来る

ようになりました。

同じころ、東洋語学学校で地理学の教師をしている人が、わたしたちのアパートを訪ねて来ました。彼とも親しく話をするようになりました。やがて彼も教会の集会に出席するようになり、6月27日にこの二人の父親はバプテスマを受けて、アロン神権の祭司に聖任されました。わたしはこの二人の兄弟たちと一緒に聖餐式^{せいさんしき}を執行する機会にあずかり、大きな喜びを感じました。わたしがこれらのことを経験できたのは、わたし自身の力によるのではなく、心からの祈りにこたえてくださった主の助けによるものであると信じています。わたしは伝道活動を通して強い証^{あかし}を得られました。そのことを主に感謝しています。

「これほどの恵みと喜びを経験したことはありません」

回復された教会の専任宣教師は主の僕^{しもべ}であり、主の代理人であることを証^{あかし}したいと思います。宣教師たちが力強く働いているのは、彼らのこの世にかかわる知識によるのではなく、ゴードン・B・ヒンクレイ大管長が語っているように宣教師一人一人が信仰のこもった祈りをささげ、謙遜^{けんそん}な心を備えているためであると証します。また、宣教師として働くには勇気、努力、献身が必要であり、助けと導きを求めるために神の前にひざまずいて祈る信仰が必要であることを証します。

福祉活動宣教師としてフルタイムで働いたこの18か月間は、わたしにとって貴重な経験でした。妻とともに過ごしてきた人生でこれほどの恵みと喜びを経験したことはありませんでした。この経験を通じて、わたしは個人的な証を得ました。すなわち「主の助けがなければ、自分自身は力のない何の働きもできない者であるが、イエス・キリストから助けを頂ければ奇跡を起こせる」という証です。

いつく地に回復された福音の種子がまかれました。それが地中深く根を張るように、そしてもっと多くの教会員が熟年に達したとき、主の業に奉仕する備えができるように祈っています。□

キム夫妻によってバプテスマに導かれた家族とともに



感動を与えた 「日本語による 『メサイア』コンサート」

——わたしたちの信仰と証を分かりやすい形で
人々に伝えていくために——

あびこ
我孫子ステーキ

「あびこタワーニ合唱団」（我孫子ステーキ聖歌隊を母体とする合唱団）の第1回「日本語による『メサイア』（ヘンデル作曲）コンサート」が昨年12月7日（土）、我孫子市民会館で行われ、御霊に満たされたすばらしいクリスマスの夕べとなりました。

総勢62人の出演者

遠くは弘前から参加された姉妹を含む46人と、合唱曲も歌ったソリスト5人にバイオリニスト1人、さらに日本語「メサイア」を26年間歌ってこられた三鷹木曜会合唱団の5人にも加わっていただき、合唱団56人、ピアニスト2人、指揮者、ナレーター3人の総勢62人で「メサイア」全53曲の中から28曲が演奏されました。

本来の「メサイア」の演奏スタイルに、主の生涯とわたしたちの信仰を織り込んだナレーションを入れ、より多くの方々に「メサイア」（救世主）という作品を理解していただくと同時に、これは神様からの大事なメッセージであることを理解してもらうようにと演出されました。

コンサート当日のステージリハーサルでは、本番に近くなるに従い参加者の方々のほどよい緊張感が増していくのが分かりました。定刻どおり午後6時に開演しましたが、ステージから見える客席はまだまばらで、少しがっかりしながらコンサートは始まりました。

涙をぬぐっている人も ありました

しかし、コンサートが始まるやいな

や、御霊がわたしたちとともにありました。コンサートの中盤では、主の栄光をほめたたえる「ハレルヤコーラス」が歌われ、続いてバイオリンとチェンバロの音色に包まれながら、ソプラノのソロが美しい調べ「我は知る、主の生くるを」を歌いました。そして「メサイア」の終曲「アーメンコーラス」を歌い終わると、拍手が鳴りやまず、500人にも膨れ上がっていた聴衆の中には、起立して拍手してくださる人たちまでいました。

ステーキ会長のあいさつの後、最後に「聖し、この夜」を歌い終わると、数秒間会場はしんと水を打ったようになり、次に大きな拍手がわきました。

明るくなった会場には、目を赤くしている人、涙をぬぐっている人もあり、多くの人はなかなか席を立たず、大きな感動が会場を満たしているのがひしひしと感じられました。ステージ上の出演者たちは、喜びと充実感で満たされ、すべては神の御手の中で行われたことを悟ったのです。

109冊の『モルモン書』を プレゼント

こうして第1回「日本語『メサイア』コンサート」は大成功のうちに終わりました。また、受け付けでは、109冊の『モルモン書』をお渡しすることができました。

「メサイア」は、ヘンデルの生存中にロンドンで56回演奏され、そのすべ



てがチャリティコンサートであったという事実を受け継ぎ、わたしたちもチャリティコンサートとして募金箱を設け、集まった5万3,066円の募金を我孫子市の福祉協議会に寄付いたしました。

「ローマは一日にしてならず」と言われますが「あびこタワーニ合唱団」も、ここまでのレベルに達するのに3年を要しました。1993年、当時のステーキ音楽委員長と副委員長が「より質の高いコンサートを計画しよう」と語り合い、音楽好きの有志が集まり、2年連続してカンタータ「世の救い主」（ジャニス・カップ・ペリー作曲）を発表して自信を持ちました。2年目のカンタータが終わった夜、指揮者の兄弟が「来年は日本語で『メサイア』を歌いませんか」と提案したのがきっかけとなり、今回のコンサートに至りました。

教会の責任で忙しい合唱団員たちは、月1、2回の練習が精いっぱい、合宿や集中練習があったとはいえ、ここまで仕上げることは驚くべきことです。ステーキ会長の絶大な支



援の下で、歌う人ばかりでなく、多くの兄弟姉妹が陰で働き、支えてくれました。我孫子ステーキの兄弟姉妹が文字どおり心をつなげてつくりあげたのです。

「プロの演奏会よりも感動」

コンサートの会場で配られたアンケート用紙には、外部の7人の方が「イエス・キリストについてもっと知りたい」と表明し、来場されたほとんどの方が「非常に良かった」と答え、中には「プロの演奏会よりも感動した」というのもありました。教会員であるな

しを問わず、来場されたすべての方々が心にとっても温かい、良いものを感じて帰られたということです。主は確かに助けてくださいました。

日本語「メサイア」コンサートを通して、わたしたちの信仰と証を分かりやすい形で世に伝えていくために、これからも第2回、第3回と発展させていきたいと願っています。数年後にはオーケストラの伴奏で「メサイア」全曲を歌うのがわたしたちの夢です。関東地域の聖徒ばかりでなく、わたしたちの「日本語による「メサイア」コンサート」の活動に参加されたい兄弟姉妹

はどなたでも大歓迎です。

心をつなげて 力を出し合うとき

今回のコンサートは、わたしたちが心をつなげて力を出し合うとき、主の業を進める大きな力となることを教えてくれました。主の降誕を記念する特別な時期に「メサイア」を通して、主の生涯に思いをはせ、主の贖いのすべての業への感謝と賛美の念を深めることができたのは、わたしたちの大きな喜びです。（レポーター：小平悦子、我孫子ステーキ音楽委員長）

「メサイア」コンサートの感激

——3万枚以上のちらしを用意——

我孫子ステーキつくばワード
大森佳子

毎年、クリスマスのシーズンを迎えると、地域の情報紙には各教会の催しがずらりと案内されます。「今年も末日聖徒イエス・キリスト教会の文字を見ることはなかったな」と思いながら新聞をたたみます。「イエス様の教会がここにいます」と声を

上げたい、「イエス様の教会はこんなことを信じています」と言えるものが何か欲しい、そんな願いが心の中で膨らんでいました。

「メサイア」(救世主)はヘンデルが作曲したオラトリオで、イエス・キリストの生涯でなされた贖いとその愛を歌ったものです。ソロとコーラスで織りなす、美しい一巻きの反物のような作品です。教会に入る前から、この曲

のとりこになり、「メサイア」を歌うか聞かせずにクリスマスが過ぎることはありませんでした。その「メサイア」を教会で発表できたのですから、こんなにうれしいことはありません。

難しい曲が多いのですが、中村兄弟の指揮が空気をかき混ぜると、マジックのようにできないものができるようになるのです。約45人の団員は限りなく可能性を持った発展途上の会員たちでしたが、その力を出し、主イエス・キリストの生涯を歌い上げることができたのです。

裏方をしてくださった方々、3万枚以上ものちらしを制作し、配布してくださったたくさんの会員の方々に感謝いたします。

最後のアーメンコーラスが終わりに近づき、結びの言葉のアーメンを歌い終わった後に、響きが空気の中に消え、霊的な気持ちと喜びがいっぱいにあふれました。ご来場の方々もきっと同じ気持ちを持たれたと思います。たくさんのお友だちの方々から、感動したとの感想が寄せられました。

心から感謝の気持ちを、天のお父様に送りたいと思います。来年は、もっと準備して、さらに多くのお友達に知らせようと思いました。(おおもり・よしこ 日曜学校教師)

「メサイヤ」のコンサートでナレーターとして活躍した兄弟姉妹



米国での音楽留学の経験から ——教会の責任は成長するための機会——

釧路地方部釧路支部出身

(米国に留学中)

浅井桃代

わ たしがアメリカへ留学してからもうすぐ5年になります。留学したいと初めて思ったのは、高校1年生のころでした。最初は、おばが留学していたことにあこがれを抱いて見ていました。

わたしが習っているバイオリンの先生が代わり、新しい先生にアメリカの大学生活の様子などを聞いたり、以前よりも高度な技術を学んでいったりするうちに、あこがれだった留学に対する思いが「アメリカでバイオリンを学びたい、与えられている才能を伸ばしたい」という気持ちに変わりました。

祝福師の祝福を道しるべに

留学する前、幾度となくバイオリンをやめてしまいたいという気持ちになり、レッスンも休みがちになっていました。それでも今何をなすべきか真剣に考え、主に祈り求めました。また祝福師の祝福を受けたことにより、これからの道を決めることができ、現在に至っています。

今わたしの学んでいるオハイオ州クリーブランドという都市は、音楽（芸術）を学ぶには大変恵まれた環境にあります。クリーブランド州立大学音楽学部に入学する前は、ブリガム・ヤング大学で語学を勉強しながらバイオリンの個人レッスンを受け、学生オーケストラに所属していました。その当時は、アメリカへ来たばかりでしたので、特に言葉の面での苦労がありましたが、音楽を学ぶうえでは楽譜（音符）という共通語がありましたので、それほど苦ではありませんでした。日々の練習はきつかったものの、コンサートで演奏したときの喜び、充実感は今でもはっきりと覚えています。

その喜びが最も大きかったのは、タバナクルでのコンサートでした。つらいことや苦しく思う時があっても、このようにコンサートなどを通して得られる喜びから、バイオリンを学び続けてきてよかったと心から思うことができます。

「どんなときにも 主に頼るように」

その後わたしは、現在も学んでいるオハイオ州クリーブランド市へ移り、

良き友人たちや教授の方々、また学びやすい環境に恵まれて生活しています。時には家族から離れて生活していると、寂しさ、悩み、練習のつらさをひしひしと感ずることがあります。しかし、小さいころから母に「どんなときにも主に頼り、信仰を表していくように」とのアドバイスを受けていました。わたしはこのような心の支えを得て学び続けることができています。

そんな中、わたしは昨年9月に、集っている独身支部（50人ほど）の扶助協会第二副会長に召されました。この責任に対し喜びをもって姉妹たちのために責任を果たしていきたいと思いました。しかし、自分の思いや意見が言葉の壁から完全には伝わらなかったり、管理会員の姉妹たちに話し合いがあるからと声をかけても集まってくれなかったり、そんなことはどうでもいいといったような態度を露骨に示されたりして、そのうち、どうしていいのかわからなくなり、この責任から解任してもらいたいという思いになりました。そして、ついには教会にさえ集いたくないという気持ちになりました。

それでも、わたしの生活から福音を切り離して考えることはできませんでした。主はこの責任を通して、わたし

現在米国 釧路出身

音楽留学の 浅井さん帰省

釧路市出身で、現在米国オハイオ州のクリ
ブランド州立大学音楽学部、バイオリン留学
中の浅井桃代さんですが、このほど、夏休みで
釧路に帰省。オーケストラ団員を目指して勉強
に励む米国での学生生活についてうかがった。

桃代さんは昨春秋に同大、またまたと、自分への評
学に編入。早速、学内オ、師は厳しい。
ーケストラの演奏の要であ、桃代さんは七歳から市内
るコンサート・シラ・スに、でバイオリン教室を開く。嘗
選ばれたり、今年五月には、野桐子さんの指導を受け、
ビバルディの「四季」夏、高校二年から釧路在住のバ
でソロ演奏する。着々とイオリニスト・札木朗里さん
実力を認められている。オに師事。市内の高校卒業後、
ーケストラと共演したのは、平成四年の秋に渡米した。
初めての体験で「演奏中は、最初はホームステイして、
無我夢中。後でビデオで、ユタ州のブリガムヤング
と、直したはずの音の癖、大学に通い、語学を勉強し
が出ていたりして、内容は、ながら、バイオリンの個人



一年ぶりに帰国し、留学生活について話す浅井桃代さん

バイオリンに夢広がる 目標はオーケストラ団員

レッスンを受けた。その後、クリブランド市のカイヤ
ホガ・コミュニティ・カレッ
ジを経て、クリブランド
州立大学へ、音楽学部の学
生といえ、一般科目や英

語の勉強も同時進行で「今
は一人暮らしですが、忙し
くて寂しいと思う暇もな
い」と話す。
「一番留学してよかったこ
とは「世界的な名門のクリ
ブランドオーケストラの
団員が、客員教授になっ
ていて、期末試験には試験官
としてアドバイスしてく
れる」と、音楽環境のよさ
をあげる。「先生も学生もよ
い人たちで、学ぶ環境に恵
まれています」。
将来の目標については
「まず、近いところでは一
つ二つ課題をクリアして、
期末試験でAの評価を維持
し続けること。その上で、
できるなら米国のオーケス
トラの団員になること」それ
には厳しいオーディション
が待ち受けている。師の札
木朗里さんは「米国はのび
のびその人の持っている
力を伸ばす教育が上手など
ころ。努力する人には惜し
みなく支援してくれる。桃
代さんは努力家で、今、そ
の努力が順調に認められて
いる」とうたい、二、三、し
ょうと解説する。「一度は釧
路に戻って、リサイタルを
開きたい」というのも目標
の一つだ。
八月二十日頃には、米国
に戻るそうだが、釧路にい
る間は、市内の学習塾の夏
期講習で講師を務め、バイ
オリン修業とはまた別の人
生体験を積んでいるのだう。

『釧路新聞』1996年8月4日付け

が精神的、霊的に成長するための機会
を与えてくださっていると感じ、責任
を果たし続けられるように断食し祈り
続けました。そのとき御霊を通して、
だれかがわたしのために祈ってくださ
っていると強い気持ちを感じました。

「常に祈りなさい。
そうすれば、わたしはあなたに
御霊を注ごう」

後日、監督と責任についての面接を
したとき、『わたしのためにだれかが
祈ってくださっていると強い気持ち
を感じました』とお話ししました。監
督は『あなた自身もちろん祈ってい
ましたよね。わたしもあなたのために
祈っていました』とおっしゃられまし
た。また日本で母も祈ってくれていた
ことを知り、信仰を失うことなく主に
心からより頼むとき、主は決して見離
されることはありません。様々な方法
を通して助け導いてくださると確信す
ることができました。

「常に祈りなさい。そうすれば、わ
たしはあなたに御霊を注ごう。そして、
あなたの祝福は大いなるものとなる。
まことに、地の宝と、それと同様の腐
敗するものを得るよりも、それは大き
いであろう。」(教義と聖約19:38)

幼いころから福音を学び、家族で祈
り、母からのアドバイスを受けていた
ことにより、わたしが遠い地にあって
も何を基盤として生活していかなけれ

ばならないのかをはっきり知ることが
できます。

家族の愛に、そして両親の助けと理
解に心から感謝しています。主が確か
に生きておられ、わたしたちが主から
離れず歩み続けるとき、主は大いなる
祝福と導きを与えてくださること、そ
して主は決して変えられることのない
御方であることを証いたします。(あ
さい・ももよ)

神様の愛を知って

——「慈愛は長く堪え忍び、親切であり、
ねたまず……すべてに耐える」——

釧路地方部釧路支部
浅井紀子

1980年4月の末、宣教師が我が家
の扉をノックするまで、宗教的

なことには一切関心のないわたしで
した。子供のころは、4人姉弟の末の
妹がカトリック教会へ行き、聖典も
身の回りにありましたが、わたしは1
ページも開いたことがありませんで

した。また、後に改宗することになるわたしのすぐ下の妹が、成人してからあるキリスト教会へ行行ったときも「宗教には深入りをしない方がいいよ」と忠告するほどでした。

なぜ、キリスト教は世界中に 広まりつつあるの

しかし、玄関先で宣教師を前にしたわたしは、かねてからの疑問であったキリストの教えが世界中に広まりつつあるのは何か訳があるのか、なぜ同じキリストを信じているのに多くの教派があるのかうかがってみました。すると彼らは「では、そのことについてお答えしましょう」と言うではありませんか。

1回目のレッスンは、ジョセフ・スミスの示現の話でした。わたしは居間のソファに座りながら「困った人たちを招き入れてしまった。どのように断ったらよいのだろう」と、そればかり考えておりました。なぜなら、その話は、あまりにも現代とかけ離れているように思え、「神からのお告げ」といった、よくある宗教のたぐいであろうと考えたからです。ですから、宣教師に「ジョセフ・スミスは森でどなたにお会いしましたか」と問われたとき、思わず「えっ、神様と……」と答えてしまいました。ほんとうは断り方ばかり考えていたので、分からなかったのです。そのときの宣教師の驚いた顔を今でも覚えています。

「祈っていただけますか」

やがて閉会になり、彼らはわたしに「祈っていただけますか」と頼みました。「とんでもない。人前で祈るなんて」と断りますと、「では一人になったときでしたら神様にお祈りできますか。」「ええ一人でしたら。」「ではジョセフ・スミスの森での経験について祈ってください。来週、そのことについての気持ちをお聞きます。」わたしは「失敗した！ また来週も彼らと会うことになってしまった」との思いで宣教師たちを見送ったのです。

夜、一人になって宣教師との約束を思い出し、ひざまずいて祈ってみることにしました。すると不思議なことに

「ジョセフ・スミスの経験はほんとうですよ」と心を感じるではありませんか。このような経験は、かつて一度もしたことがなく、不思議というより強い衝撃を受けました。わたしの心、わたし自身は、まったくジョセフ・スミスの示現を否定していたにもかかわらず、祈ると「ほんとうです」との感じを受けるのです。

2回目のレッスンで、宣教師は「ここに金版があります。見たいですか」と、黒いカバーをしてあるものを示しました。「金版？ 見たいです。」彼らがファスナーを開けると、本が1冊。わたしは、またしても「なあーんだ、本か」とつぶやき、今度こそ断らなければと心に決めました。

急に文字が 読めなくなるほどの 涙があふれて

ところがレッスンの終わりごろ、「モロナイ書第7章だけでも読めますか」と聞かれました。わたしは、本は幼いときから好きでしたので、「7章だけでしたら読めますよ」と、またもや約束をしてしまったのです。「しまった」と思いながら読みだしたわたしでしたが、7章の終わりに近い45節「慈愛は長く堪え忍び、親切であり、ねたまず……」の辺りに差しかかると、急に文字が読めなくなるほどの涙があふれてきました。

わたしは、手にしたこの書物を最初のページから読まなくてはと思いました。そして、宣教師がしきりに「この本は神様の言葉だ」と言っていたのを思い出し、そうだとするなら神様は、人にどんな思いを伝えたいのだろうと考えながら読み始めたのです。

それからは、昼も夜もわたしの心は震えおののき、穴に入って身を隠したいとの心境でした。この『モルモン書』を読むまでは、わたしは自分の信念を持ち、努力していけばよいと考えていたのです。しかし、その努力しようという気持ちさえも、実は神様の深い愛から来ているのだと知り、もはやこの書物を手離すわけにはいけなくなりました。

しかし、当時、毎週日曜日には、夫

と子供たちとともに両親の家を訪問する習わしでした。わたしは、生活習慣を変える困難、また自分自身を変える困難を思っ迷いに迷いました。

「わたしもお話が聞きたい」

そんなとき、人見知りが激しく、それまで宣教師が見えると、ほかの部屋へ逃げ出していた娘の桃代が「わたしもお話が聞きたい」と言いだしました。そして一度レッスンを受けると「わたしもイエス様のようにになりたい。バプテスマを受けたい」と言うのです。

わたしは決心し、1980年6月29日に、9歳の娘と一緒にバプテスマを受けたのです。これはほんとうに主の導きでした。そして不安に思っていた事柄も、毎週パンと水を頂くことによって強められ、解消していったのです。わたしたちは、時にずっと先のことで心配して戸惑ってしまいがちですが、どんなときでも主を信頼すれば大丈夫なのだと知りました。

1年半後、扶助協会の責任の召しを受けました。ところが、わたしは幼いころから人と接するのが苦痛で、幼稚園も半年で退園、自閉症一步手前という状態で、心配した母にあちこちの相談所へ引かれていったほどでした。そうした恐れから、召しを受け入れられないでいると、支部長は家に帰って祈るようにと勧めてくださいました。

「今まで助けを与えなかった ことがありますか」

その夜の祈りの答えは、こうでした。「浅井姉妹、わたしが今まで助けを与えなかったことがありますか。」わたしは心の中が熱くなり、主が導いてくださっていること、どんなときにも主の助けがあることを改めて知りました。決心して責任を受けると、主は確かに助けてくださいました。そして自分を尊ぶことを学び、人々への愛が強くなるという恵みを頂きました。

2年前には、ちょうど娘が旅行中のアメリカのセントルイス方面で大洪水があり、1週間もまったく連絡がつかない状況が続きました。わたしはとても不安になり、『賛美歌』44番を歌ってからお祈りしようと思いました。

主イエスを遣わせし 父の愛を思つて

やがて歌が3番に至り、「主イエスを遣わせし父 その愛、悟り難し」と歌ったとき、わたしは急に歌うのをやめました。神様がわたしたちのために、どのようなつらい思いをして独り子イエスを十字架におかけになったのか、という思いに至ったからです。

わたしは、このときまでそれを知らなかったことを恥じました。娘への祈りを、神様の深い愛への感謝の祈りへと変えて祈り終わったとき、「安心して」とのささやきを頂きました。神様は様々な手段を通じて御心^{みこころ}を伝えてくださることを改めて知りました。

主は生きておられ、どのような人であつても心にかけ、どのような時にも助けたいと手を差し伸べていらっしゃる。御心を伝えたいと願つておら



浅井紀子姉妹(写真左)と娘さんの桃代姉妹

れます。わたしたちが、それを知りたい、得たいと心を向けるなら、あらゆる手だてを通じて人々を導いてくださ

ることを心から証^{あかし}いたします。(あさい・のりこ 釧路地方部若い女性会長)

チューリッヒではぐくんだ信仰

——「わたしに最もふさわしい学校と
生活環境を与えてくださいました」——

横浜ステーキ大船ワード出身
(スイスに留学中)
野田絵里奈

わたしがスイスのチューリッヒで生活を始めてから1年半が過ぎ、その間、多くのことを学びました。また、家族の愛と天のお父様の愛を強く感じました。

バレエ留学の夢

2年前の冬、わたしはバレエ学校のオーディションを受けるためにヨーロッパに向かいました。ドイツとベルギーの学校のオーディションを受けましたが、どちらの学校にも合格できませんでした。外国のバレエ学校に留学するのは子供のころからの夢でしたので、夢を碎かれて大きなショックを受けました。ドイツの学校は有名な学校で、ぜひとも入りたいかったので大変残念に

思いました。

その後わたしは3つの学校に合格しましたが、スイスの学校に行くのがいちばん良いと心に強く感じ、そこに留学することにしました。

実際にスイスで生活を始めて学校に通って分かったのですが、スイスの学校がわたしにとっていちばん良い学校でした。わたしの担任であり校長であつた先生はとても厳しい人ですが、すばらしい指導者で、多くのプリマバレリーナを育ててきた有名な人でした。彼女は今年の夏を最後に引退しましたので、わたしは最後の指導を受けた教え子の一人になりました。

教会や神殿に近く最高の環境

学校のシステム、レッスンの内容、カリキュラム、教師陣、どれを取ってもわたしが以前に希望したどの学校よりも優れていました。今わたしは一人

部屋で生活していますが、もしドイツの学校に入学していたら、4人部屋に入らなければならず、一人で静かに聖典を読むことも祈ることもできなかったのです。また教会は近くにあり、若い女性の会長会の姉妹も近くに住んでいて、いつも助けてくださいます。スイス神殿もチューリッヒから車で1時間ぐらいの所にあります。春休みには死者のためのバプテスマを受けるためにスイス神殿に入ることもできました。

2年前、オーディションに落ちたとき、何も分からずに悲しい思いをしました。天のお父様はわたしにとってその学校に入るのがふさわしくなかったことを御存じで、わたしに最もふさわしい学校と生活環境を与えてくださったことが今はよく分かります。

日本にいたころ、年1回の発表回、2回の公演、3回のコンクールがあつたので、夕方6時ごろから11時ごろまで練習がありました。そのため、日曜日教会に出席できないこともありましたが、毎日祈りを欠かさず、『モルモン書』を読むように心がけました。また両親は、わたしに家庭学習セミナーで教えてくれました。母は、神様や

信仰について、また目上の人、同僚、後輩とどのように接したらよいかなど、毎日の生活の中で福音を実践する方法を細かく教えてくれました。

自分の信仰によって

モルモン2世として生まれ、子供のころから両親と教会に行くことが当たり前だったわたしには、祈ることも聖典を読むこともすべてが習慣になっていて、自分の信仰によって心から行っているとはいえなかったと思います。チューリッヒでの生活が始まると、「セミナーの勉強しなさい」とか、眠い日曜の朝に「教会に遅れるよ」と言われてわたしを起こしてくれる両親はそばにいません。

自分の意志だけで信仰の道を歩んでいくかどうかを選ぶ時が来ました。わたしは毎週教会に行くことを選びました。そして、毎日聖典の勉強をするように心がけました。そうしていくうちに、わたしの証と信仰はだんだん強まっていったのです。



「ドン・キホーテ物語」からキトリのバリエーションを踊る野田絵里奈姉妹

外国で一人生活するのは大変ですが、いつも家族の愛と天のお父様の愛に支えられ、守られていると感じています。天のお父様は、わたしたち一人一人をよく御存じで愛してくださっています。

す。わたしたちが神様の戒めを守って信仰の道を歩んで行くときに、神様はわたしたちにいちばんふさわしいものを与えてくださることを証します。(のだ・えりな)

神殿参入から得た力 ——「自分のなすべきことを考えるがよい」——

神戸伝道部奈良地方部名張支部
長綱数江

19 94年11月1日、肝臓切除の手術を受けたわたしは、回復良好と喜んでいましたが、12月に入り胸水や腹水がたまるようになってきました。身動きできないほど体にチューブをいっぱいぶら下げて、イエス様に助けを求めて苦しんでいました。

病室を訪れてくださった 菊地神殿長

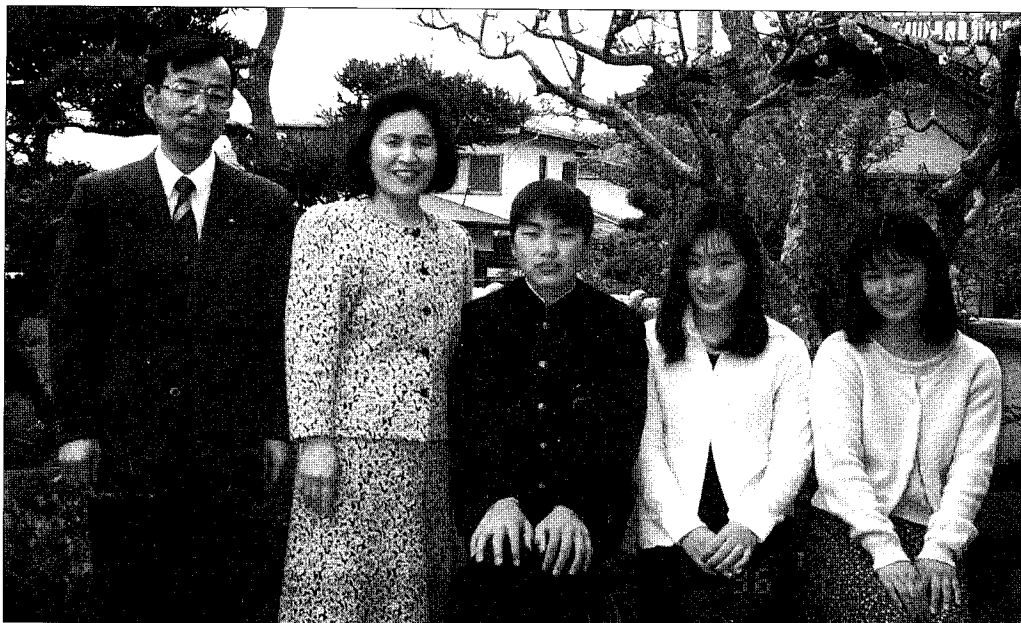
そんな闘病のまっただ中であって、菊地良彦神殿長と中野兄弟（神戸副伝

道部長）が病室を訪れてくださったのは、12月12日（日）真夜中というより13日に入っていました。それまで祝福を受けて手術に臨んだのですが、生死をさまよう状態のわたしに、主人は何かしてやりたいと思ったようです。そして大阪の特別集会にお見えになられた神殿長に祝福をお願いしたのです。わたしなどにもったいないことで、よくそんな恐れ多いことを主人はしたものだとも思います。でも当時の主人にしてみると、わたしを助けたい一心だったようです。

ハガイ書を何度も 読み返しました

時間はかかりましたが、神権の権能による癒しの祝福を受けて、わたしは回復に向かいました。退院すると、神殿長は心から喜んで、多くのメッセージや資料を送ってわたしを励ましてくださいました。その資料の中に「自分のなすべきことを考えるがよい」（ハガイ1:7）という題の文書を見つけました。長い年月教会に通っていますが、『旧約聖書』の中にハガイ書があることさえ気がつかないでいました。

わたしは、たった3ページのハガイ書を何度も読み返し、考えてみました。そのハガイ書に、実は重要なことが書かれていることを神殿長は教えてくださいました。今までわたしは日々の生活に追われ、子供たちを教育し、満たしてやりたいと夢中で走ってきました。毎週教会へは行きますが、神殿に



長綱ご家族

は年1度行けばいい方です。けれども、そんな走り方が主の喜ばれる方法であったのだろうかと考えました。特に大病をした後ですから、真剣に自分を見詰めることができます。清い真心をもって神殿に思いを向けていたであらうか……。いいえ、そうではありませんでした。あるときには義務感だけで、自分の先祖が待っていることすら忘れ、ただ神殿へ行くことさえあったのです。

喜びとなった神殿参入

わたしは目が覚めました。「自分のなすべきことを考えるがよい」との御言葉がわたしに当てはまったのです。そして手術後1年ぶりに神殿に行けるようになりました。今までの参入とは異なり、心は喜んでいきます。義務感もありません。神殿の礼拝堂で涙が止めどなくあふれてきました。喜びとともに悲しみや悩みもかばんにいっぱい詰めて、主の前で大ぼろしきを広げてしまいました。主はそれらをしっかり受け止めて、おみやげに力（能力）を与えてくださいました。それはまるで嫁いだ娘が里帰りして、両親に心の内を打ち明ける様子に似ていました。心から主に感謝しています。

力を受けて神殿から帰ったわたしの仕事は、家族歴史（系図）を調べることです。何年か放ってあった資料を出

して整理し、来る日も来る日も先祖の名前を書き、儀式を受けられるように準備しました。

父の目から流れた一筋の涙

わたしの父は今から40年ほど前に、長野県松本市で、末日聖徒の宣教師の訪問を受け入れ、父とわたしたち子供は、神様とイエス様について学んでいました。毎週日曜日、夕方6時になると、二人の長老が、帽子をかぶり自転車で我が家に到着しました。家庭集會が続くこと半年。そうしているうちに、父は胃癌に侵されていることが分かり、大学病院へ入院。手遅れでした。

わたしは、当時、小学5年生。二人の宣教師が病室を訪れてくださったとき、わたしはちょうど父を見舞ってありました。先輩の長老は、ベットに横たわる父の右手を取り、じっと目を閉じ、その手を放しませんでした。きっとお祈りしてくださったのでしょう。父の目から一筋の涙が流れました。そのときの光景は、今でもわたしのまぶたにしっかりと焼きついています。

父は名ばかりの退院をし、家に帰るとこん睡状態に陥りました。そのときも宣教師が訪れてくださり「祈りましょうか」と言われたようですが、姉は意味が分からなかったのでしょう。「もう、だめです」とお断りしたようです。父は間もなく他界し、宣教師と

の集會も途切れました。57歳でした。

父の受け入れた宣教師のいる教会へ

大好きだった父を亡くし、当時は、寂しくて父の帽子や衣類を出しては抱き締めていました。父のにおいがしたからです。わたしは、大きくなったら父の受け入れた宣教師のいる教会へ行きたいと思い続けていました。

しばらくの年月の後、ようやくその教会を見つけました。そして高校2年生のときにバプテスマ

を受けました。そのころ、菊地長老は、巡回宣教師として松本支部を訪問してくださいました。それから何十年もして、わたしは、手術を受け、その菊地長老に祝福していただきました。ほんとうに不思議に思います。

母も、10年ほど前に亡くなりました。わたしは、そんな大切な両親の結び固めをも怠っていたのです。けれども2月に再び神殿を訪れ、夫婦（両親）の結び固め、また、親子（わたしとの）結び固めを終わりました。ほんとうにうれしかったです。

亡くなった母が夢に

神殿から帰って休息を取っているときに夢を見ました。わたしは家のトイレのお掃除をしていました。何げなく後を振り向くと、正装した着物姿の母がにこやかに立っているではありませんか。そして、一言「夏休みに来る？」と聞きました。そこでわたしは目覚めましたが、その一言が気になりました。夏休みにわたしはどこに行くのでしょうか。地方部大会のときにこの経験をお話すると、松下伝道部長は「長綱姉妹のお母さんが夏休みに待ってる所は神殿です」と教えてくださいました。

そして、待望の8月がやって来て、子供たちと東京神殿に向かいました。神様、お導きありがとうございます。（ながつな・かずえ 支部初等協会展長）

主の証をするに恥ずることなく

——公開講座で反モルモンの証言に弁明——



あかし
我孫子ステーク
北千住ワード
加藤喜久江

キリスト教系の大学に通っている息子から、「モルモンの知識人」というテーマで行われる公開講座を受講してみてもどうかと勧められ、出席してみることにしました。講師は、その大学の卒業生で、最近、末日聖徒についての本を出版し、ほかの大学の教授でもありました。

わたしが教室に入ってみると、ほとんどが若い学生と先生方で、出席者も20人ほどでした。わたしは、少し場違いな所に来てしまったような気がして、隅の方に座っておりました。

講義内容は、残念ながらこの教会の批判に終始しました。研究者の立場から、教会の良い面も、悪い面も紹介するのだらうと思っていたわたしにとって、大変つらい時間となりました。わたしたちが良いこと、あるいは誇りに思っているような事柄も、見方を変えるとこのように解釈されるものかと、

身も凍る思いで聞いておりました。何よりもつらく感じられたのは、参加している若者の白紙のような心に、この教会に対して間違った概念が植え付けられてしまうのではないかということでした。

とても長く感じられた1時間半の講義の後で、質疑応答の時間が設けられました。最初に手を挙げた若者は、「わたしは以前、ユタ州にホームステイをした経験がありますが、今先生が話されたような大変悪い印象は受けませんでしたか……」と言いました。

また次の若者は「わたしは科学に興味を持っています。モルモン教徒の中には有名な科学者もいますが、それでは彼らは、矛盾だらけのモルモンの教義をどう受け止めているのでしょうか」と尋ねました。

そして、同大学の教授も「先生は何のために、このようなことを言うのですか。モルモン教会をキリスト教として認めたくないからなのですか」と質問され、その講師は「そうです」と答えました。そして次に「モルモン教会は、『聖書』を認めていないのですね」との質問にも同様に「そうです」と答えているのを聞き、びっくりしました。

そのときまで隠れるようにしていたわたしでしたが、思わず手を挙げ、『聖書』に対する誤りを正しました。結局その講師は、彼の見解や認識を変えようとはしませんでした。最後に司会者は「今日はモルモンの方のお話も聞くことができ、大変有意義でした」と結ばれました。

今あの出来事を振り返って「神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである。だから、あなたは、わたしたちの主のあかしをすること……を、決して恥ずかしく思ってはならない」(2テモテ1:7-8)という言葉の意味が心から分かったように思います。

あのとき、勇気を与えてくださった神様に感謝するとともに、わたしをそのような場にお送りくださったことに神様の御手を感じずにはいられません。

また、この出来事を通して、世の中にわたしたちに対する様々な雑音があっても、わたしたちが日々、真のクリスチャンとして、正しい生活を送るならば、必ずわたしたちの模範は人々に受け入れられ、人々がわたしたちの教会を正しく理解する助けとなると感じました。

あの日、講義に出席していた若者たちが先の講演に惑わされることなく、御霊の導きにより正しい判断をすることができるよう心から願っています。(かとう・きくえ ワード扶助協会会長)

酪農と信仰生活

——「与えられた力と手段以上に……

働くことのないように」——

静岡ステーク富士ワード
中島由美子(酪農家)

わたしの職業は酪農です。両親と3人で約130頭の牛(子牛も含む)を管理しています。わたしはこの仕事をする中で、自分が末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であることに心から感謝しています。

北海道で短大の学生だったときに改宗して、神様とイエス様が生きておられ、何よりわたしが神様の娘の一人であることを知りました。どんなときでも神様を信頼していれば、必ず何らかの助けが与えられることを、様々な経験を通して確信しています。

学生時代は家族の元を離れて生活していましたので、何の障害もなく活発

に教会の活動に参加していました。宣教師とのジョイントレッスンには、ほとんど毎日のように参加するなど祝福された日々を送っていました。ところが、静岡の朝霧高原にある実家に帰って来てからは、教会が約40キロも離れていて、車で約1時間かけなければ行けません。

安息日だからといって仕事を休んでしまえば、約40頭の搾乳牛たちの乳房はパンパンに張ってしまい、とてもつらい思いをさせなくてはなりません。また、時には急に教会に行けなくなることもあります。ですから、安息日に備えて、月曜日から土曜日までにでき



共進会場の中島由美子姉妹

るだけ仕事を済ませるようにして、日曜日はどうしてもやらなければならない仕事だけをするように心がけています。それだけに、教会に集えたときの喜びはひとしおです。

それでも学生時代の安息日の過ごし方や、毎週活発に集える多くの兄弟姉妹と比べると、生き物相手の仕事のため、どうしても教会に行くことができ

なくなったりする自分が情けなくて、何度も仕事を辞めて「日曜日は必ず休みが取れる仕事に就こう」とか「家を出て一人で生活しよう」と思い悩むことがありました。そんなとき一つの聖句に出会いました。

「あなたは……与えられた力と手段以上に急いだり、それ以上に働いたりする

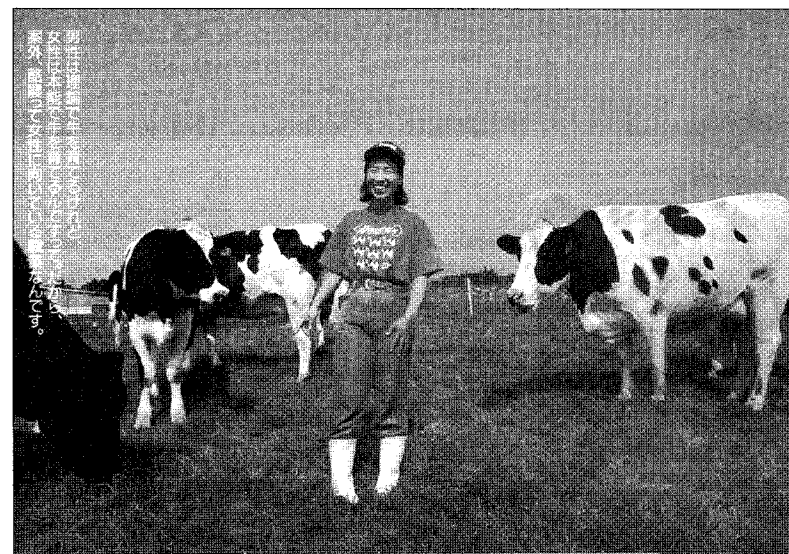
ことのないようにしなさい。しかし、最後まで励みなさい。」（教義と聖約 10：4）

この聖句を読んだとき、頭をハンマーで殴られた気がしました。わたしはただ教会に行くことばかりを考え、ほかの兄弟姉妹と自分を比較することしかしていなかったことに気づき、もっと広い意味でクリスチャンでなければ

ならなかったと悟ることができました。

それからは、小さな責任でも、自分に与えられた責任（家庭訪問教師の責任や家族の中で神様の娘として生活すること）をできるだけ果たしていくように心がけています。また、それまでのように人と自分を比較せずに、できることを一生懸命果たすよう努めているうちに、天父から数え切れないほどの祝福を頂いている自分に気づくことができました。自然に恵まれて生活できる祝福、自然を通して様々なことを学べる祝福、神殿に参入できる祝福、家族に愛し愛されている祝福など数え挙げれば切りがありません。

わたしたち一人一人は、それぞれ明るくこの世に光り輝く存在であることを知っています。神様を信頼し、自分にできることを自分なりに行っていくな、^{あかし}「もう道はない！」と思っていたことにも必ず道が開けてきて、昔のよい状況のときよりももっと良くなることを証します。（なかじま・ゆみこ）



★ すべての人に言いたい ★

中島由美子

酪農家

酪農家の仕事は、神様のお手伝い。
良い牧草も、健康な牛も、すべて自然が作るものだから。

神様の御心に任せて、自然の恵みを受けて、酪農家の仕事は、神様のお手伝い。良い牧草も、健康な牛も、すべて自然が作るものだから。酪農家の仕事は、神様のお手伝い。良い牧草も、健康な牛も、すべて自然が作るものだから。酪農家の仕事は、神様のお手伝い。良い牧草も、健康な牛も、すべて自然が作るものだから。



牛乳と果物の盛り合わせ。写真は中島由美子姉妹の撮影。

酪農家の仕事は、神様のお手伝い。良い牧草も、健康な牛も、すべて自然が作るものだから。酪農家の仕事は、神様のお手伝い。良い牧草も、健康な牛も、すべて自然が作るものだから。酪農家の仕事は、神様のお手伝い。良い牧草も、健康な牛も、すべて自然が作るものだから。



「開拓者150年記念、若い男性キャンポリー」開催のお知らせ

末 日聖徒イエス・キリスト教会の開拓者150年記念行事の一環として、日本の「若い男性」が一堂に会する「開拓者150年記念、若い男性キャンポリー」を以下の要領で開催します。

テーマ：「信仰こめて、一歩ずつ」

日時：1997年8月4-8日（4泊5日、テントで野営）

会場：東京都稲城市大丸 米空軍-多摩レクリエーションセンター（JR南武線南多摩駅より徒歩10分）

おもなプログラム（予定）：冒険の旅、神殿訪問、キャンプ技術の習得、奉献の地巡り、富士登山などの活動

参加対象者：末日聖徒イエス・キリスト教会の「若い男性」、ボーイスカウト隊、シニア隊とその指導者および両親

参加費用：一人12,000円（全日程）

申し込み締切日：3月26日

*参加希望者は、所属ユニットの担当者を通じて、実行委員会までお申し込みください。なお、詳細については、すでに各ステーク／地方部、ワード／支部あてに送付されている「開催要項」を参照してください。（若い男性キャンポリー実行委員会）

価格改定のお知らせ

2月1日付けで、下記のビデオ商品の価格が改訂されました。

商品名	カタログ番号	旧価格	改定価格
ビデオカセット①	53478 300	1,800円 →	1,200円
ビデオカセット②	53479 300	1,800円 →	1,200円
ビデオカセット③	53480 300	1,800円 →	1,200円
ビデオカセット④	53481 300	1,800円 →	1,200円
新たな決意をもって教える（ガイド付）	53007 300	1,200円 →	1,000円
初等協会指導者訓練	53008 300	1,200円 →	1,000円
アロン神権定員会を活気づける（ガイド付）	53011 300	1,200円 →	1,000円
天父の計画（手話入り）	86257 300	1,500円 →	900円
本物の幸福（手話入り）	86256 300	1,500円 →	900円
愛の働き（手話入り）	86255 300	1,500円 →	900円
放蕩の果てに（手話入り）	86252 300	1,500円 →	900円
永遠の家族（手話入り）	86253 300	1,500円 →	900円
ステーク宣教師訓練プログラム（ガイド付）	53032 300	1,500円 →	1,200円
メルキゼデク神権を機能させる	53034 300	1,500円 →	1,000円
わたしたちのプライマリー	53179 300	1,200円 →	1,000円
助けを必要としている人に手を差し伸べる（ガイド付）	53257 300	1,200円 →	900円
大いなる富・モルモン経	53285 300	1,200円 →	1,000円
大いなる富・モルモン経（手話入り）	86254 300	2,000円 →	1,000円
教会の使命を果たす	53408 300	1,500円 →	1,200円
主の山（英語）	53300	700円 →	550円

1月に召された専任宣教師 第208期生 11人



前列左から1-5, 後列左から6-10

〈名 前〉

1. 平瀬 裕子
2. 中西 貞子
3. 北村ひろみ
4. 前田 操
5. 松本真由美
6. 赤塚 博
7. 山城 政次
8. 宮崎亜紀子
9. 今井美奈子
10. 渡辺 浩行
11. 吉田 忠俊

〈出身地〉

- 名古屋M／富山D／高岡B
 名古屋M／三重D／松坂B
 東京東S／千葉W
 横浜S／川崎W
 福岡S／佐賀B
 町田S／藤沢W
 町田S／町田第一W
 名古屋M／三重D／鈴鹿B
 東京S／三鷹W
 静岡S／富士W
 仙台M／盛岡D／盛岡B

〈伝道地〉

- 福岡伝道部
 仙台伝道部
 福岡伝道部
 札幌伝道部
 札幌伝道部
 札幌伝道部
 岡山伝道部
 札幌伝道部
 仙台伝道部
 札幌伝道部
 神戸伝道部

S：ステーキ, M：伝道部, D：地方部, W：ワード, B：支部

お知らせ

『子供の歌集』(34831 300, 定価850円)の発刊に伴い, 旧在庫品となりました下記の3点を値下げして販売します(在庫商品のみ)。新刊の『子供の歌集』は, 下記の3冊から選曲したものに新曲が加わり122曲を収録しています。

- 『子供の歌』(33429 300)

217曲収録 900円 → 200円(特価)

- 『子供の歌-増補』(33437 300)

33曲収録 450円 → 100円(特価)

- 『活動の歌』(33434 300)

28曲収録 450円 → 100円(特価)

役員の異動

1996年12月17日から1997年1月13日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の異動(敬称略)

- 札幌西ステーキ新琴似ワード

監督: 岩山勝幸

- 京都ステーキ城陽ワード

監督: 原田茂夫

- 京都ステーキ伏見ワード

監督: 佐藤公治

皆さんの原稿を募集しています

◎ご投稿の際には連絡先(住所, 電話番号), 教会での責任(役職名), 所属ユニット名を記入し, 写真を同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただくことがあります。

◎お願い——海外に召される日本人宣教師を紹介いたします。伝道の召しを受け取り次第, 編集室に写真を添えてお知らせください。(氏名〔フリガナ〕, 伝道部名, 召された月を明記)

◎あて先: 〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会 『聖徒の道』編集室

☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275

海外に召された日本人宣教師



いまなり かおり
今成由香里

ソルトレーク・テンブルスクウェア

訪問者センター伝道部,

1996年10月, 東京北M／新潟D／新潟B出身